まりさんのパリ通信

リンク付き

パリまり（パリ在住）

（INDEX）

怒れるフランス「黄色いベスト運動」 （2019.2）
ジャポニズム 2018：響きあう魂 （2019.3）
ロマ考① まりさんのパリ通信（3） （2019.4）
ロマ考② まりさんのパリ通信（4） （2019.6）
ロマ考③ まりさんのパリ通信（5） （2019.7）
フランスの結婚式① まりさんのパリ通信（6） （2019.8）
フランスの結婚式② まりさんのパリ通信（7） （2019.9）
仏の民泊:シャンブル・ドット まりさんのパリ通信（8） （2019.10）
シラク氏と日本 まりさんのパリ通信（9） （2019.11）
いつまで続く？ まりさんのパリ通信（10） （2019.12）
大規模スト まりさんのパリ通信（11） （2020.1）
バスの運転手 まりさんのパリ通信（12） （2020.2）
パリコレ まりさんのパリ通信（13） （2020.3）
フランスでは・・・ まりさんのパリ通信（14） （2020.4）
外出制限下のフランスでの生活 まりさんのパリ通信（15）（2020.5）
ロックダウン解除 まりさんのパリ通信（16） （2020.6）
カフェが開いた！まりさんのパリ通信（17） （2020.7）
今でしょう！ まりさんのパリ通信（18） （2020.8）
2003 年の猛暑の思い出 まりさんのパリ通信（19） （2020.9）
職場での出来事① まりさんのパリ通信（20） （2020.10）
職場での出来事② まりさんのパリ通信（21） （2020.11）
2 度目のロックダウン まりさんのパリ通信（22） （2020.12）
コロナ下の年末年始 まりさんのパリ通信（23） （2021.1）
職場での出来事③ まりさんのパリ通信（24） （2021.2）
フランスの大学生救済政策 まりさんのパリ通信（25） （2021.3）
ワクチン騒動 まりさんのパリ通信（26） （2021.4）
隣は何をする人ぞ まりさんのパリ通信（27） （2021.5）
職場での出来事④ まりさんのパリ通信（28） （2021.6）
漫画パス？ まりさんのパリ通信（29） （2021.7）
宮殿ホテル？ まりさんのパリ通信（30） （2021.8）
フランスのバカンス① まりさんのパリ通信（31） （2021.9）
フランスのバカンス② まりさんのパリ通信（32） （2021.10）
フランスのバカンス③ まりさんのパリ通信（33） （2021.11）

偽陽性 まりさんのパリ通信(34) (2021.12)
ひったくり① まりさんのパリ通信(35) (2022.1)
ひったくり② まりさんのパリ通信(36) (2022.2)
「何かがおかしい」まりさんのパリ通信(37) (2022.3)
「ほんまかいな！！」まりさんのパリ通信(38) (2022.4)
裁判 まりさんのパリ通信(39) (2022.5)
事務所での出来事⑤「今朝、仕事に来たら･･･」まりさんのパリ通信(40) (2022.6)
帰国までの難関① まりさんのパリ通信(41) (2022.7)
帰国までの難関② まりさんのパリ通信(42) (2022.8)
お客様は泥棒？ まりさんのパリ通信(43) (2022.9)
一期一会 まりさんのパリ通信(44) (2022.10)
新生児命名ランキング まりさんのパリ通信(45) (2022.11)
「カフェのギャルソン」まりさんのパリ通信(46) (2022.12)
仏の医療事情① まりさんのパリ通信(47) (2023.1)
仏の医療事情② まりさんのパリ通信(48) (2023.2)
バックパック旅行記 ① まりさんのパリ通信(49) (2023.3)
バックパック旅行記 ② まりさんのパリ通信(50) (2023.4)
バックパック旅行記 ③ まりさんのパリ通信(51) (2023.5)
バックパック旅行記 ④ まりさんのパリ通信(52) (2023.6)
バックパック旅行記 ⑤ まりさんのパリ通信(53) (2023.7)
事務所での出来事 ⑥ まりさんのパリ通信(54) (2023.8)
バックパック旅行記 ⑥ まりさんのパリ通信(55) (2023.9)
バックパック旅行記 ⑦ まりさんのパリ通信(56) (2023.10)
迷惑な爆破予告 まりさんのパリ通信(57) (2023.11)
バックパック旅行記 ⑧ まりさんのパリ通信(58) (2023.12)
バックパック旅行記 ⑨ まりさんのパリ通信(59) (2024.1)
バックパック旅行記 ⑩ まりさんのパリ通信(60) (2024.2)
バックパック旅行記 ⑪ まりさんのパリ通信(61) (2024.3)
バックパック旅行記 ⑫ まりさんのパリ通信(62) (2024.4)
バックパック旅行記 ⑬ まりさんのパリ通信(63) (2024.5)
バックパック旅行記 ⑭ まりさんのパリ通信(64) (2024.6)
バックパック旅行記 ⑮ まりさんのパリ通信(65) (2024.7)
盗難事件の顛末 まりさんのパリ通信(66) (2024.8)
日帰りミラノ旅行 まりさんのパリ通信(67) (2024.9)
オリンピック期間 まりさんのパリ通信(68) (2024.10)
レディファースト まりさんのパリ通信(69) (2024.11)
贅沢な美術鑑賞 まりさんのパリ通信(70) (2024.12)

まりさんのパリ通信(1)（2019.2）

怒れるフランス「黄色いベスト運動」

パリまり（パリ在住）

今フランスで巻き起こっている「黄色いベスト運動」は昨年 11 月、自動車燃料増税に反対する抗議行動から始まり、マクロン大統領の政策に不満を表明する国民により瞬く間に全国に広がりました。現在も毎週土曜日に大規模なデモが行われています。
この国では政党や労組の主導によるデモはよく行われるのですが、今回は今までとは違い、現状に不満を持つ人々、増税により即生活に影響を受ける人々が SNS を介し主義主張を超えて団結した抗議行動になっています。
日本でも大きく取り上げられる暴動ですが、デモ参加者の多くが平和的にデモを行なっている中に極右、極左や「壊し屋」と呼ばれる輩が紛れ暴徒化、破壊行為を行なっています。
この一連の行動により政府は 19 年の燃料税増税を断念、12 月にマクロン大統領は TV 演説で「多くのフランス国民が共有する怒りがあることを忘れない」と国民の不満に理解を表明、最低賃金の引き上げや残業手当にかかる社会保険料の免税、年金受給額が低い定年退職者に対して一般社会税の引き上げを廃止するなどの処置を発表しました。
それでも収まらないデモに大統領は 1 月 13 日、国民へ呼びかける「手紙」を発表しました。その中で大統領は全ての暴力行為は許さないとしつつも、税金の負担や使い道について不満が高まっていることに、「国民の怒りを解決策に変えたい」と共に答えを探ろうと呼びかけました。
そして「国民大討論」として税制・公的支出、国の組織・公共サービス、民主主義・市民権、市民発議の国民投票制度などについて質問形式で国民に意見を求め、対話集会を2カ月かけて開きすべての提案を検討すると約束しました。

この提案の後でも「黄色いベスト運動」は激しさを増しています。あまりにも多くの矛盾と問題を抱えているフランス、全ての問題が解決する日は来ないでしょう。ただ多くの国民が自分の意思で抗議行動に参加し、それが政府の方針をも覆す事ができるという事実を日本人として日々驚きの思いで眺めています。

（写真説明左上「治安部隊を挑発するために放火する」右上「マスクをかぶって暴れる準備をする壊し屋達」左下「壊された ATM」右下「投石用の石が必要」）

（筆者はご母堂が NT にお住まいで、目下パリ、シャンゼリゼで働いておられます。編集委員）

まりさんのパリ通信（2）（2019.3）
ジャポニズム 2018：響きあう魂

パリまり（パリ在住）

日仏修好通商条約（1858 年）160 周年を記念してフランスで 2018 年 7 月から今月まで半年以上にわたり行われた「ジャポニズム 2018」がほぼ終わりを迎えた。
この間、日本にいてもこれ程色々な一流の催しを一度には見られないだろうという程素晴らしい行事が相次いだ。国宝や重要文化財の作品が一堂に展示され、歌舞伎や文楽、能狂言、現代演劇、舞踊、映画からマンガ・アニメ展、建築、ファッション、和食迄様々な分野での日本が紹介された。

期間中ルーヴル美術館の入口ピラミッドの中に、名和晃平さんによる高さ 11 メートルの巨大な金の玉座が展示され美術館を訪れる人達の目を引いた。
チェルヌスキ美術館では琳派美術の流れを説明、国宝《風神雷神図屏風》が展示され、プチ・パレ美術館では欧州初の大規模な若冲展が開かれた。
チームラボの《teamLab:Au-deladeslimites（境界のない世界）》では観客が思い思いに壁に触れ、床に座り流れる映像の一部になっていた。

9 月には照明デザイナーの石井幹子、リーサ明理母娘によるライトアップがエッフェル塔に日本の美を纏わせパリの夜空を飾った。雅楽が流れる中、エッフェル塔に真っ赤な太陽が昇り、富士や月、

桜のイメージが次々と現れ消えて行く。最後に尾形光琳の「燕子花図？風」が鮮やかに映し出された時には歓声が上がった。

10 月にはアクリマタシオン公園では「よさこい」や「阿波踊り」など地方の 7 つの祭りが披露された。現地の人達にも広く参加を募り、着物や甲冑を着た仏人がひと時日本人体験を楽しんだ。
信玄公祭りでは何故か行列の中に眼帯姿の伊達政宗が黒田長政（？）の兜を被りやる気なさそうに携帯電話をチェックしながら歩いていたのはご愛嬌か。
公園内に設置された屋台には長蛇の列で、たこ焼きを買うのに 30 分以上待つと言われ諦めたほど大盛況だった。

フランス人の日本への興味は欧州一と言われる。
19 世紀後半に日本の美術工芸がゴッホやモネに影響を与えたジャポニズム、今回の「ジャポニズム 2018」で現代のフランス人は新たな日本を再発見してくれただろうか。

まりさんのパリ通信（3）（2019.4）
ロマ考①

パリまり（パリ在住）

「ロマ」をご存知だろうか？
差別用語になるのであまり使われなくなったが「ジプシー」といえばお分かり頂ける流浪の民だ。フランスでは「漂流する人達」という意味の「Nomarde」や「Gensduvoyage」（移動する人々）という言葉を使う事もある。ロマの中にはフランスに同化し普通に社会生活を送っている人達もいるが、犯罪に手をそめる者達も多い。

年長者は物乞が多い。職場の前の道も定位置になっているようで、たまに警官に追い払われる事もあるが、大体日中はいつも地べたに女性が座っている。雨の日も座っているので傘を差し入れたこともある。噂によると郊外にまとまって住んでいてパリの街中に仕事にやって来るそうだ。車で送られてきてそれぞれの場所に降ろされ迎えが来るまで物乞いをするという。メトロでは若い女性が赤ちゃんを抱いて「この子を食べさせていかなければなりません」と無心してくる。しかし、この赤ちゃんは同情を誘う道具として使われており、仲間の赤ちゃんを「ちょっと今日貸してね」と使い回ししているらしい。

未成年者はスリ行為と観光地で通行人を捕まえては「恵まれない人のために署名をお願いします。」と用紙を突き出して来る詐欺行為などを行う。そこにはもうすでに何人かの名前と住所が書かれており、自分もと記入して気がつく。住所の後に寄付した金額が書かれてある。数十ユーロ

（数千円）から 100 ユーロ（12500 円）とみんな結構な額だ。ここで「街頭署名でみんなこんなにも出すものだろうか？」と詐欺に気づく人はいいのだが、気の弱い人やナイーブな人は「こんなには出せないけど 1 ユーロ（125 円）では他に比べてあまりにも少なすぎるかなぁ」と頑張って 10 ユーロ（1250 円）くらい出してしまう人もいる。いいカモだ。中には「これに署名した人は xx ユーロを支払う」と書かれているものもあり、断ってもしつこく付きまとわれるそうだ。それだけではない。署名をしている周りで仲間達がすきあらば財布や携帯を盗もうと狙っている。

メトロでは主に 10 代の子供達がグループで獲物を探している。よくある手口はこうだ。まず 2,3 人が前に立ち、電車に乗り込む時に入り口で立ち止まる。後ろから入ろうとした人が彼等にブロックされ動けない状態になった時に後方担当が獲物を挟み財布を抜き出すというわけだ。ホームから入口で挟まれている観光客に「気をつけて！スリよ。」と云っても分かってもらえず、走り去る電車の中からロマ達に『ざまーみろ』とこちらを馬鹿にした合図を送られたこともある。

毎日ロマ達と顔を突き合わす、これがパリの日常だ。
（右上写真は「事務所前が定位置の物乞いをするロマ」です。）

まりさんのパリ通信（4）（2019.6）
ロマ考②

パリまり（パリ在住）

以前メトロの階段でロマの子供達に狙われたことがある。女の子 2 人組が後ろにぴったりくっついて大きな声で話している。「これはおかしい」と一旦横に退き 2 人をやり過ごし睨んでいるとまだ後ろに3人目がいた。10 歳前後の男の子が後ろから私のカバンに手を突っ込んでいたので思わず足蹴にしてしまった。彼は「なんでお前は僕を叩くんだ！」と拳を振りかざす。『そっちが文句つけるか？！』とあきれ、「警察呼ぶよ」と一言。わめきながら去って行ったが、結局同じ電車に乗るので獲物を狙いながらワゴンを移動してくる彼らと視線を合わせ又火花を散らす。電車の中では日本語でも「スリにお気をつけ下さい」とアノンスが流れる。

仏人の同僚に「もし私が財布を擦られそうになって抵抗し彼らに怪我をさせてしまったらどうなるの？」と聞いたら「君が捕まる」と返された。「そんな理不尽な！」だ。第一「何故彼らは捕まらないのか？」と誰でも思うだろう。何度か現行犯で駅のホームで私服警官に尋問されている子供達を見た事がある。フランス語が分からない彼らも片言は喋れる。「Moi（私、僕）、Mineur（未成年）、toi（お前）、pasdedroit「（捕まえる）権利ない」だ。

社会道徳や倫理観を教えるべき親や大人（とはいえ、これはこちら側の観念で彼らにとっては『盗みは悪いことではなくばれるとまずいもの』なのだろう）から物の盗み方や捕まった時の逃れ方を教わっているのだろう。

彼らの背後には仏国外の非常に組織化されたマフィアが付いているという。パリ警察によると、今年の初めからこのマフィアの圧力下で盗みをさせられている子供たちによるスリ被害はパリ及び郊外で 33%増加しているらしい。
知人が財布を盗まれ 8 区（パリには 20 の区がある）の警察署に行ったところ、その日の夕方の時点で 8 区だけで 200 件もの盗難届が出されていたらしい。こうなると捜査どころか盗難届を発行するのも追いつかない。あまりにも多い被害に鉄道会社は警察当局と協力して 49 の駅の窓口で被害者が直接苦情を申し立てることを可能にする措置を取らなければならなくなった。

仏警察連合パリ地域書記官によると「この現象を阻止するには電車 1 台につき 2 人警官が必要である」という。パリの鉄道網約 200km の毎日午前 8 時から午前 1 時まで 350 人が派遣され毎月、百人の泥棒を逮捕しているがこれらの犯罪者の半数以上が未成年者であるため、大部分は直ちに釈放されてしまうとのこと。彼らの多くは東ヨーロッパから来ており、中には 1 人で 25 もの違う名前で登録されている者もおり、実際にこれらの子供たちが誰であるかを知ることは不可能らしい。実際に連行しても未成年者、住所も身分すら証明できず、言葉も分からない子供達をいつまでも拘束しておくわけにはいかない。さすがに殺人となると捕まるのだろうが軽犯罪程度ではすぐ釈放される。実際に私が見た子供達も「もうするな」の注意だけでお咎めなしで放たれていた。彼等はその足で場所を変え、また次の獲物を探しに行く。自衛するしかないのだ。

まりさんのパリ通信（5）（2019.7）
ロマ考③街中で毎日のように遭遇するロマ達との攻防

パリまり（パリ在住）

彼等に同情はするのだ。

嫌悪、差別され「存在しない人々」として扱われ、公的サービスもあまり受けられず、学校にもほとんど行かず（就学の権利は保証されているが、自分達の伝統的な文化以外の知識を子供達が身につけるのを嫌がる親達がいたり、学校の勉強について行けず落第する子も多い）就職もできない、ととなるとどうやって生きていけばいいのか。
仲間内で結束し、外部の人間は自分たちを疎外する敵とみなし、マフィアに利用され搾取されながら物乞いをするか、盗み、騙して生活の糧を得て行くしかないのではないか。自分がもしそんな状況に立たされたら同じようにならないと言い切れるだろうか？

ロマ達の多くはブルガリアやルーマニアから流れてくる。マフィアから送られて来る者たちも多い。彼らの中にはそれらの国の国籍を所持する者もいる。
2007 年にサルコジ政権は「同化政策」と相容れないロマ達を強制送還する事に決めた。2010 年の 9 月までに、8 千人以上のルーマニア及びブルガリア国籍のロマ達が゛本国に送還された。仏政府から出る 300 ユーロ（+子供一人毎に 100 ユーロ）を受け取る代わりに「自発的」に国外退去に応じたロマ達の中でお金をもらい一旦仏から出て又舞い戻って来るというケースも出たため、この政策は一旦廃止、のちに減額された。
この政策は国連人種差別撤廃委員会や欧州社会人権委員会、欧州議会らの非難を受け、2012 年の政権交代以来、緩和された。

仏政府も手をこまねいているわけではない。彼らに「移動許可証」を発行したり、5000 人以上の人口の市町村に対して彼等のためにキャンプが出来る土地の確保と整備や住居建設を義務化させたり、そのために少なくない費用を投じたりもしてきた。
しかし、土地や住居を提供して彼等を無理やり定住させようとしても無理がある。元々キャンピングカーで移動生活を送っている彼等の中には定住を望まないものもいるし（強制的追放や迫害から逃れる為に移動、定着出来なかったという歴史もある）、定住しても周辺の住人達との間で問題が起きたりもする。
彼等に住宅を提供する団体で働いていた人がこう言っていた。「ロマ達はアパートの中で鶏を飼いバスタブで羊を焼く。彼等は集合住宅での暮らし方を知らないんだ」と。

実際には実行されているとは言い難いが、仏では『困難な状況に陥っているすべての人々を平等に扱い、尊厳を保証し、強制退去の命令を出す前に、各々のケースを検討し、その人々に合ったきめ細かい対策を取ること』となっている。
しかし、いくら支援を行っても彼等への偏見がなくならない限りロマ問題は一朝一夕で解決できる問題ではないだろう。

まりさんのパリ通信（6）（2019.8）
フランスの結婚式①

パリまり（パリ在住）

少し前の話になるがまだ寒い 5 月の週末、ピカルディー地方の住人 280 人の小さな村で行われた友人の結婚式に行って来た。
40 代の日仏カップルの彼らはパリ郊外に住んでいるが、新郎の親族が住む緑が広がる可愛い村で式を挙げた。

フランスの小さな町や村では教会と役場がある広場が中心にある所が多い。彼らの家もその広場に面したお屋敷であった。子供達は小さい頃、車の入って来ないその広場を遊び場にして育ったという。
未だに自分達で広い庭園の手入れをすると言う新郎のお父さんは 91 歳、お母さんも 80 代後半なのにもかかわらず、自然の中で暮らすとこんなに若々しくいられるのかとびっくりするほど年齢を感じさせないご夫婦であった。4 人の子供達は一人目がスペイン人、2 人目がギリシャ人、3 人目がフランス人、そして 4 人目が今回日本人と結婚という国籍を問わずファミリーの一員に迎え入れる懐の深さを持った家族であった。

新婦のご両親とお兄さん、そして新郎が日本に行く度にお世話になるという「日本のお母さん」も海を超えて駆けつけて来られた。
両親と同じ待遇で迎えられ、家族の一員としての待遇を受けた彼女が「私が『日本のお母さん』と呼ばれて新郎の実のご両親は気を悪くされていないかしら」と気に病んで通訳の友人に「自分の気持ちを実のご両親に説明してもらえないか」と頼んできた。仏歴の長い友人は彼女を慰めつつも「（新郎のご両親は）そんなの気にしていませんよ」と即却下。2 度目に涙ぐんで頼んできた時はさすがに通訳をしに行ったが、戻って来た時に「実のご両親の反応は？」聞くと「なんでそんな事気にしてるんかわからへんって顔してはった」との事。『自分の息子が日本に行く時には親身になって世話をしてくれる人に感謝の気持ちこそあれ』といったところなのだろう。思わず笑ってしまったが、日本人の繊細さと仏人の大らかさを垣間見た気がした。

まりさんのパリ通信（7）（2019.9）
フランスの結婚式②

パリまり（パリ在住）

日本の全て段取りされている結婚式とは違って仏では手作りの式が多い。普通は 1 年ほど前から準備するらしいが、彼らは数ヶ月前からだったので最後の方は睡眠時間 3 時間で追い込みをかけていた。役場での式の予約から招待状の作成、食器の買い付け、食事に出す料理の手配から予算を抑えるために鶴や花を自ら作ったり、テーブルクロスを探しに布地屋にまで足を運んでいた。
「昼食と夕食の間に食器を洗わなきゃ」と聞かされた時、ウエディングドレスで皿洗いをしている花嫁の姿を想像して「それはいくらなんでも」と思い、ゴム手袋持参で行くことにした。

式には家族や親しい人達 50 人程が参加、小雨が降りそうな中、羽織袴の新郎と大正時代の着物を来た新婦が赤い蛇の目傘をさして登場した。
小さな村役場の部屋には全員入りきれず何人かは廊下で待機、その後軽く一杯飲んでから新郎の曽祖父が設計したという村の宴会場で昼食をとった。日本の少し名の知れたレストランのシェフが腕を振るい、本物の日本食を味わうことが出来た。
お色直しで花嫁は新郎のお母さんが着たというシンプルで上品なドレスで登場し、それがとても似合っていた。

夜は参列者が 100 人に増え、新郎も参加した友人達によるバンドで盛り上がり、思い思いダンスを楽しんだりした。
夜もふけて帰り際に幸せのおすそ分けくれた花嫁とハグをして「いろいろお世話になりました。ありがとう。」と言われた時は彼女のここまで大変だった年月を思い出して、手の掛かる娘をやっと嫁がせた母親のような気持ちになりほろっときた。

その日は数キロ離れた中世に栄えた街の中心の宿に泊まった。翌朝部屋の窓からパリのノートルダムかと見まごうカテドラルが目の前に広がり再び幸せな気持ちになった。

まりさんのパリ通信（8）（2019.10）
仏の民泊：シャンブル・ドット（Chambred' hote）

パリまり（パリ在住）

日本でもオリンピックに向けて民泊の制度が整えられつつあると聞く。

フランスでは昔から自分の家や離れの部屋を旅行者に提供する「Chambred' hote（シャンブル・ドット）」という民泊システムがある。素泊まりでもいいが、家の人達や他の宿泊客達と一緒にその地域の料理やワインが並ぶ夕食のテーブルを囲める所もある。ホテルより安く泊まれるので時々利用している。
南仏の小さな村では宿に到着したものの誰もいなかった。道行く人に聞くと「ああ、村長さんね。今なら村役場にいるよ。」と教えてくれた。なんと村長さんが自分のうちの部屋を貸し出していたのだ。

家族旅行で行ったルマン近くの日仏カップルのお宅では事前に「夕食は何がいいですか？」といくつかのメニューを提案してくれ、当日母の好きなチーズまで用意していてくれた。その宿の庭からみんなで見た満天の星はいい思い出だ。

小さな古城を改装した宿ではオーナーのおばあさんが「先日来たパリジャンが『夜静かすぎて逆に眠れなかった』と言っていたわよ」と笑った。

ロートレックの生まれた町の近くに泊まった時は、1 年半前から Chambred' hote を始めたというご主人が「毎日お客さんとフルコースの食事をするので 15kg も体重が増えたよ」と嘆いていた。

ノルマンディーのエトルタ近くの農家では夕食に美味しいウサギの肉と手作りシードル（りんご酒）を堪能した翌朝、庭を散歩した。美しく咲き誇る花の写真を撮ったり羊に草をやったりゆっくり過ごしていると庭の隅に小屋があるのを見つけた。近づいてみるとウサギ小屋だった。中には子ウサギしかしない。思わず「あ、ごめん、昨日お父さんとお母さん食べちゃったかも」と呟いた。
（絵・秋の田園風景佐伯浩）

まりさんのパリ通信（9）（2019.11）
シラク氏と日本

パリまり（パリ在住）

無類の親日家だったフランスのジャック・シラク元大統領が 9 月 26 日に亡くなった。日本の文化・芸術に造詣が深く、又心底日本を愛した人であった。
来日回数は 40 回以上とも 50 回以上とも言われ「年に 1 度は日本に行かないと落ち着かない」と語っていた。

相撲への情熱は眼を見張るものがあり、1986 年と 1995 年にパリに大相撲を招致し、2000 年には日本で「仏共和国大統領杯」が創設されるほどだった。
自身でもやってみたかったらしく仏のスポーツ紙のインタビューで「身長は充分にある（シラク氏は身長 192cm だった）、体重は時間をかければ増やせる」と語っていた。
在日仏大使館の職員が「大相撲のある日は日曜であっても出勤して結果をパリの大統領官邸に Fax しなければならない」とボヤいていると聞いた事がある。
相撲の試合なしには夜も日も明けなかったらしく全ての試合（場所）はビデオに撮られ、見た後は書斎の本棚に並べられていたという。

94 年の夏には箱根の旅館に 1 ヶ月逗留した。襖で仕切られた部屋で畳の上に寝、檜の風呂に入るのが大好きだったという。ここから 95 年の大統領選への決意を固めたと言われる有名なバカンスだ。
大統領になった後も夫が疲れていると感じた時にシラク夫人は何度か日本行きを勧めたという。夫人によると日本はシラク氏の心の深いところで「錨」になっていたらしい。

弔問の記帳台が設けられたエリゼ宮や棺が安置されたアンヴァリッドにはその死を悼む人々が長い列を作った。
サン・シュルピス教会で行われた国葬には約 30 カ国の首脳が参列した。これほど氏から愛された日本から参列したのは駐仏大使だけだった事が少し残念だった。

まりさんから 10 月 24 日に届いたメールに「日本は雨の中『即位の礼』が行われましたね。仏からは相撲をこき下ろしたサルコジ元大統領が出席。シラクさんが元気だったら喜んで行っただろうと思いました。」とありました。あまり注目されませんでしたが、サルコジさんに古式行事の感想を聞いてみたかったですね。（編集委員市原）

まりさんのパリ通信（10）（2019.12）
いつまで続く？

パリまり（パリ在住）

「しまった、催涙ガスが入ってきた！」慌てて窓を閉めたが、暫く目がチカチカした。
夏の頃は下火になっていた黄色いベスト運動（彼らもバカンスには行くのだ）も始まってから 1 年を迎え、デモが又活気づいて来た。
ということは壊し屋達も張り切って参加して来るということだ。車を燃やし、ガラスを割る。それに対して警察や憲兵隊は催涙ガスを巻く。先月もデモ隊が歌を歌いながら通り過ぎて行った後、煙が上がり憲兵隊が走っていくという見慣れた風景をテラスから眺めていたらガスが入って来たというわけだ。非日常なはずの異常事態も続けば日常になる。

3 月にシャンゼリゼ通りが破壊された時も「外が騒がしいな」とは思っていたが、建物内にいるとそれほど大事には感じない。「いつもの事だ」くらいに思っていたが、その日は流石に買い物に出た時、駅周辺にある Kiosk3 軒が全て火を噴いていたので「オララ、新聞買え

ないじゃん」と呟いてしまった。仕事の後に少し周辺を歩いてみたら見事に店舗やオフィスビルが破壊されていた。

こう書くとパリはとても危険なところだと思われてしまうが、暴れているところに近づかなければそれ程でもない。200？300m 先で暴れていても少し離れたところではテイクアウトの店にコーヒーやサンドイッチを買う人達が行列をなしている。店側も暴徒が来たら直ぐに締められるようにシャッターを少し下ろして営業している。黄色いベストはお客様でもあるのだ。
土曜のデモの日に騒動が起こっても週明けには普通の生活に戻っている。
週末限定の暴動…変な国フランス。
（写真は放火された Kiosk とその内部、焼け残ったエッフェル塔が痛々しい。筆者）

まりさんのパリ通信（11）（2020.1）
大規模スト

パリまり（パリ在住）

12 月 20 日現在、フランスでは年金改革に反対するゼネストが半月以上も続いている。交通機関の便数も大幅に減らされているために国中に大混乱を引き起こしている。ストやデモには慣れっこの仏人も 1995 年以来の長期化に頭を抱えている。

人々は家と職場の往復だけで力を使い果たし、クリスマス前の稼ぎ時であるはずの店は閑散とし、ホテルはキャンセルが相次ぎレストランはガラガラだ。ストレスがたまり朝夕のラッシュアワーでは人で渋滞する駅構内に罵声が飛び交う。

郊外から来る職場の受付嬢は朝始発でやって来て、帰りは列車、バスを 3 度乗り継ぎ「昨日は帰るのに 3 時間かかった。」と咳をしながら暗い顔で言った。みんな疲れているのだ。幸いにも私はメトロの自動運転のため通常運行される線で何とか移動出来るため大事には至っていないが、列車は超満員で 5 本乗れない事もあった。楽しみにしていたオペラ座でのバレエもキャンセルされた。

高齢化により年金制度の見直しは必要と多くの国民は認めているのだが、「受給額が減るかも」、「既得権を失うかも」となれば話は別だ。フランス人の権利意識は高い。
スト開始から今まで大きなデモが 3 度行われたが、政府と労組の折り合いはつかず収束の気配は未だ見えない。年末もストを続ける構えで、家族で過ごす大切なクリスマスに帰省できない人達も大勢出るとみられている。年を越す可能性もありそうだ。

長期にわたるストで経済的損失は莫大なものになるだろう。満員電車に揺られながら「仏人よ、自分達で自分達の首を絞めてはいないかい？」とぼやいている。

まりさんのパリ通信（12）（2020.2）

バスの運転手

パリまり（パリ在住）

フランスの田舎に行った時の事、小さな村のローカルバスに乗った。
バスの運転手が途中から乗ってきた知り合いとおしゃべりを始める。
「おや、ミッシェル、元気にしてたのかい？子供はどう？」
「ああ、マルセルはもう今年から中学生だよ。」
「へえ、あのちっちゃかった子がね、よく転んで泣いてたのに。やさしくていい子だよねぇ。」
「ああ、何とか普通に育ってくれたよ、いろいろ母親がいなくて大変だったけど。」
「そうだねぇ、もう何年になるんだ、彼女が出て行ってから？まぁ、それも人生、よくある話さ。」
etc…
5 分ほどの会話の中でバスの乗客全員がその男性と息子の名前、年齢、彼が離婚して一人で息子を育てている事など彼の人生の多くを知った。

旅行先の小さな海沿いの街では中心地から駅へ行き、到着する電車を待つため 10 分程止まった後、その先に向かうバスに乗った。終点まで行きたかった私は駅で止まったバスの運転手に「その先のスーパーに行って水を買って戻って来たいんだけど、時間あるかな？」と聞いた。彼は「じゃあ、スーパーで待ってなよ。寄ってやるから。」と申し出をしてくれた。田舎の運転手は優しい。

パリでは乗っていたバスが停留所ではない所でいきなり止まった。ドアを開けて何も言わずに出て行き、乗客が『何事か』と騒ぎ出す前に素早く戻って来た運転手の手にはパンオショコラが握られていた。よほどお腹が空いていたのかパン屋に横付けして買いに行ったのだ。運転手は何事もなかったようにパンをかじりながら出発した。乗客も誰も文句は言わない。大らかなものだ。日本だったらどうなるかなと想像しておかしくなった。

まりさんのパリ通信(13) (2020.3)

パリコレ

パリまり(パリ在住)

ダラダラと間延びしたストが１ヶ月半以上続き、家と職場との往復だけの日々を過ごしていたある日、気分転換にパリコレのショーを見に行くことにした。丁度オートクチュールコレクションの時期だったので、高級ホテルの豪華なサロンや昔の貴族の館、大使館などで行われる華やかなショーを堪能した。

昔、オートクチュールの顧客になれる人の数は世界中で僅か 2000 人?3000 人と言われていたけれど今はどうなのだろう？いずれにしても限られた人達だけのために作られるものであることには変わりない。
あるメゾンでは一着の服を一人の顧客が注文したらその洋服はその人のためだけの一着となるはずが、複数の人から同じ服に注文が入るとデザインを少し変えたりして作るそうだ。
ある時二人の顧客が同じ服を注文した。メゾンは二人に同じ服を作った。この二人が有名人だった事から一人がその服を着て TV に出ているところをもう一人が見てしまい「あら、私このお洋服もう着れないわ」と仰ったとか…

ショーが時間通りに始まる事はまずない。30 分はたっぷり待たされる中、最前列に座る有名人や着飾った観客をカメラマンが囲む。
いよいよ始まると 8 頭身以上の同じ人間とは思えないすらりとしたモデル達が何百万円以上はするであろう華麗なドレスを身に纏い、大きなシャンデリアの下を歩く。

ハプニングもつきものだ。あるショーではウエディングドレスを着たフィナーレを飾るモデルが転けた。無理もない、まず街中では履かないだろう高いヒールで、セッティングには何人ものスタッフが広げたドレスの裾と長いベールをターンの時には一人で捌かなければならないのだ。近くにいた観客に手を差し伸ばされ何とか立ち上がったモデルはまた静々と戻って行った。

ショーの後はメゾンがカクテルを用意している時もある。シャンパンを飲みながら談笑する。たまには別世界に身を置くのも悪くない。

（筆者のご母堂は西神に住まわれ、筆者はパリでお仕事をされています。表紙を含め3枚の写真は筆者から送られてきたものです。編集委員）

まりさんのパリ通信（14）（2020.4）

フランスでは・・・

パリまり（パリ在住）

世界中に蔓延しているコロナウイルスだが、仏でもいろいろな対策が打ち出されている。
以前から出されていた外出制限が 3 月 24 日時点でさらに強化された。といってもまだ必要最低限の物は買いに行けるし、犬の散歩も OK だ。ただしこれらの理由での外出は 1 日一回、1 時間以内、自宅から 1km 以内に制限された。自己申告の外出証明書も必要で、時間を記入することが義務付けられた。医療目的での外出も救急もしくは医療関係者からの呼び出しがない場合には許可されない。
違反すると 135 フランの罰金、15 日以内の再犯の場合は 1,500 フラン、30 日以内に 4 回の違反の場合は 3,700 フランの罰金および最高 6 ヶ月の禁固刑とかなり厳しい処置となっている。

私もすでに 10 日程の自宅待機をしているが、それ程の不便はまだ感じていない。
ある程度の食料品や日用品のストックはあるし、必要なら買い出しにも行ける。大きな窓があるので日が燦々と降りそそぎ日光浴も出来る。時々は近くの公園に緑を見に行ったりもする。

コロナ疲れを避けるためにニュース等はあまり見過ぎないようにしている。
たまにチェックすると「ある地域では医療崩壊が始まり、助かりそうにない患者は見捨てられ出している」なんてギョッとするニュースもあるが、インフォデミックに振り回されてストレスをためても仕方がない。先は長いのだ。
人に会うこともままならないので Line や Skype でのコンタクトも増えた。

夜 20h になるとみんなが一斉に叫んだり、ライトを点滅させたり、鍋を叩いたりする。人命を救うために奮闘する医療従事者への感謝と連帯の意を示すのだ。
如何なる状況でも楽しみを見出しながら乗り越えて行くフランスの人々は逞しい。

まりさんのパリ通信（15）（2020.5）

外出制限下のフランスでの生活

パリまり（パリ在住）

ロックダウン下での生活が 6 週間過ぎた。
フランスではコロナによる死亡者の数が 22,000 人（4／24 現在）を超えた。これは自宅死は含まれていないようなので実際の数はもっと膨れ上がるだろう。

通常での外出は 1 日 1 時間のみ、マスクとビニール手袋をつけ、帰ってくると靴を拭いて風呂場に直行、シャワーを浴びて服や鞄、買ってきたものを一つ一つ消毒する。面倒臭いので自然と外出も減った。

5 週間程前には通気孔を通して上階と思われる住人の激しい咳が聞こえてきた。「（コロナに）かかったんだろうな、お気の毒」と思いつつも、2003 年 SARS が流行した時に香港の大型マンションで、下水管や排気孔がつながっているアパートで集団感染が起こり 40 人以上が亡くなった例を思い出し、一応通気孔をテープで止める。外に出ても家の中にいても危ないことには変わりはない。
かかっても病院には行けないのだ。連絡しても「家で安静にしていて下さい。」と言われる。かかった人によると 1 日 1 回医者が様子を尋ねる電話をかけてきてくれるらしいが「呼吸が苦しくなる」

まで病院には行けないそうだ。どちらにしろ出来れば病院には行きたくない。健康体である事に感謝する。
皮膚科の薬をもらいたい時には tèlèconsultation（在宅相談）を利用してみた。普段はなかなか予約が取れないので処方箋を出してもらうだけならこちらの方が便利だ。Zoom によるセミナーにも参加してみた。結構在宅でも出来る事があるものだ。コロナ後はいろいろな物事が変わるのだろう。

今のところ仏政府は 5 月 11 日から段階的に外出禁止解除を行なうと言っているが、フィリップ首相は「5 月 11 日以降、外出禁止以前のような日常に戻る事は当分ない」と繰り返した。長期戦になる事を覚悟しておくしかないであろう。（筆者からの写真、シャンゼリゼ、スーパーのレジ）

まりさんのパリ通信（16）（2020.6）
ロックダウン解除

パリまり（パリ在住）

5 月 11 日からフランスではロックダウンの段階的緩和が始まった。
レストランや劇場など人が集まる場所はまだ開いていないが、小売り店などには行列が出来ているところもある。公共交通機関ではマスク着用が義務付けられ、ラッシュアワーにはまだ証明書の所持が必要だ。自宅から 100km 以内であれば外出証明なしで移動が可能になり、パリ郊外の観光地の住人が「パリジャンが戻って来た」と嬉しそうに話していた。

ロックダウン後、不動産業界が賑わっている。
コロナ離婚と言うのだろうか、7 週間一緒に閉じ込められたカップルが、第 2 波が来た時には「同じパートーナーともう一度同じ家で過ごすのはごめんだ」と部屋を探し出しているらしい。子供がいる家庭も子供達をのびのびと庭のある家で過ごさせてあげたいと、郊外の庭付き一軒家の需要が高まって来ているという。オフィスも一人一人のデスクの間をあけなければならないとなると現在の場所では手狭になったり、逆にテレワークで済むのであれば広いオフィスは必要ないと引越しを考えるところも増えて来ている。

第 2 波の心配と共に経済的な問題も間接的直接的に現れて来た。
通訳の知人は全く仕事がなくなり、冗談交じりに「首くくろかと思った」と言う。ブラック企業の翻訳の仕事を今までの 20 分の 1 の報酬で受け「時給 2 ユーロ（約 240 円）やわ」と言いつつこなしている。レストランをやっている知人はまだ営業できないのでほそぼそとお弁当を作り「今日は

15 個売れた。焼け石に水よ」とボヤく。横ではご主人が補助金や銀行融資の手続きに頭を抱えていた。2 月末にパリでの就職が決まったという事で駐車場を貸した人は、働き出した途端のロックダウンで 3 月早々から僅か数千円の賃借料が払えないと言って来た。困った時はお互いさまだから待つのはかまわないのだが、しばらく連絡が途絶えた後、どうしようもなくなって日本に帰っていた事がわかった。
コロナによってこれからの生活がどのように変わって行くのか、まだ先が見えて来ない。

まりさんのパリ通信（17）（2020.7）

カフェが開いた！

パリまり（パリ在住）

フランスではロックダウンの規制緩和が 5/11、6/2 と段階的に行われた後、6/14 にマクロン大統領がテレビ演説で対新型コロナウイルスへの「最初の勝利」を収めたと宣言、制限の大幅解除を発表した。

パリでは公共交通機関利用時のマスクはまだ義務だが、ラッシュアワーの就労証明書の携行義務がなくなった。店舗、劇場、映画館、美術館、モニュメントも徐々に再開し始めている。ここに来て少しずつ普通の生活が戻りつつある。とはいえ、このまま収束を迎えると思っている人はそれ程多くはない。

長期間閉じ込められていたパリジャン達が待ち侘びていたのはカフェだ。「カフェのないパリ」、想像すらしていなかった事が 3/17 にいきなり現実となって目の前に現れた。出勤前にカウンターでエスプレッソを立ち飲みし、ランチタイム、夕方のアペリティフ、夜の外出時の一杯と日に数回行くこともある社交場のカフェが突然閉まった。生活の一部がなくなった感じだった。

もちろんそんな事で大切な人たちとの交流を止めれるはずはない。外出禁止中は FaceTime、Zoom や Skype などで繋がり、それぞれの家で顔を見ながらアペリティフを楽しむ「Aperoskype（アペロスカイプ）」が広がった。

ロックダウン解除を待ちわびていた人達が、今パリのカフェのテラスに溢れている。今迄当たり前だと思っていた日常がどれほど幸せなことだったのか理解したのだろうか、みんな楽しそうに語り合っている。その中をマスクをしたギャルソン（ウエイター）が忙しそうに動き回っている。
そう、この風景がパリ!

まりさんのパリ通信（18）（2020.8）

今でしょう！

パリまり（パリ在住）

6 月 6 日にベルサイユ宮殿、そして 7 月 6 日にルーブル美術館が再開した。
あまりの訪問客の多さに辟易して足が遠のいていた場所だが、行くなら季節が良くて観光客も少ない、のんびりと鑑賞や散策が出来る今がチャンスだ。

早速（1 年間行き放題で数回行けば元が取れる）1 年カードを作り、天気の良い平日、ピクニック気分でベルサイユへ向かった。RER（イル＝ド＝フランス地域圏急行鉄道）では新しい車両に当たったせいか綺麗で乗り心地もいい。ベルサイユに行くだけあって、天井や壁には宮殿の写真が貼られてあってなかなか豪華に感じる。

宮殿に到着、太陽王ルイ 14 世の騎馬像に迎えられゲートをくぐる。行列に並ばなくても良いのが 1 年カードの特典、すんなり入場して宮殿内を駆け足見学で済ませる。今回の目的はマリー・アントワネットが愛し’た離宮プチトリアノン周辺なのだから。

宮殿の喧騒を嫌い、彼女が家族やお気に入りの取り巻きだけを招待したというプチトリアノン、そこから続く庭園と「王妃の村里」。自然を模して人工的に造った村に農夫や家畜を連れて来て、個人用のテーマパークを作ってしまうなんてなかなかのものだと思うのだが、計算して造られただけあってのどかな美しい風景になっている。

人工洞窟に向かう小道にある看板に「王妃はここにいた時にベルサイユ行進（1789 年 10 月 5 日、女性を中心としたパリ市民が「パンをよこせ」と叫びながらベルサイユ宮殿まで行進した事件）を知らされた」とある。
宮殿に呼び戻された王妃は国王と共にパリに連行され、2 度とここに戻ってくる事はなかった。

英国風庭園の「愛の殿堂」の横のベンチで、稲荷寿司を食べながら「ここでアントワネットとフェルゼンが密会してたかもね」などと想像してみる。
そうだ、今度庭園で「ベルサイユのばら」を読破するというフランスに来る前からの夢を叶えなくっちゃ！（写真右上は RER の車内、左下は「マリー・アントワネットがここにいた」とある看板、右下は愛の殿堂（LeTempled'Amour））

まりさんのパリ通信（19）　（2020.9）
2003 年の猛暑の思い出

パリまり（パリ在住）

比較的夏は過ごしやすいフランスでも今年は猛暑の日が続いた。
幸いな事に長くても 1 週間位なので、なんとか凌げている。
しかし、長く続かないから一般の家庭や多くの施設などでは、エアコンが設置されているところが殆どない。この状況が 2003 年の大猛暑で、約 2 万人が死亡するという悲劇を生んだ。あまりに数の多さに遺体安置室も満杯になり、ランジス中央市場の冷蔵倉庫やパリ郊外の工業地帯に冷蔵テントを設置し遺体を保管する事になった程だ。

我が家は高層階で西向きの部屋なので強烈な西日が差し込む。台所のステンレスの台の上に置いていたゴム手袋を取ろうとしたらビリっと破れた。熱でゴムが溶けてステンレスに張り付いていたのだ。窓際に置いていた木の机は反り返った。

そんな時に冷蔵庫が壊れた。一大事だ。即注文して、一週間後の仕事が休みの水曜日に配達日を指定した。仏は日本ほど融通が効かない。配達を頼むとよくて午前か午後が指定できる位で、一日中家で待っていなければならないことも多い。それでも来ればいいのだが、来ない時もあるので大変困る。その日も外出も出来ずに待ち続け、夕方に一度電話を入れて「何時に来るの？」と尋ねたが「今日は混んでいるからね」と適当な事を言われたまま、とうとう来なかった。

翌日、クレームの連絡を入れると「配達日、今日（木曜日）になっているわよ」と言われた。「昨日も電話したけど、そんな事言われなかったわよ。私は水曜日以外、日中家にいられないのだから、他の日に配達日を指定することはありえない。来週の水曜日には間違いなく配達して下さいよ！」と云うと「ダメよ、来週の水曜は 7/14（日本でいうパリ祭で祭日）だから休みです」と返された。それまでイライラしていたのをかなり抑えて対応していたのだが、ついに「この暑いのに冷蔵庫なしで 3 週間も過ごせって云うの！！」と怒ったら「私達にも休む権利があります」と言われた。何故か『まあ、相手の言うことにも一理あるな』と思ってしまう程、仏に馴染んで来た自分をおかしく思いつつ、冷蔵庫なしでの辛い猛暑の 3 週間を乗り切った。

まりさんのパリ通信（20）　（2020.10）
職場での出来事①

パリまり（パリ在住）

事務所のあるビルには色々な国のオフィスが入っている。。
ビルの改装工事が終わった頃、同じ階のクエート企業のオフィスの責任者らしき人が、地下の駐車場への行き方がわからないと尋ねに来た。丁度溜まっていたゴミを地下の駐車場へ捨てに行くついでがあったので「ご案内しますよ」とゴミ袋を持って歩き出すと「あなた達は自分達で掃除をするのか？！」と心底驚いた様子で尋ねられた。裕福な国クエートでは掃除などの下働きは外国から出稼ぎに来た労働者がする仕事なのだ。。

日本では小さい頃から学校の教室も自分達で掃除をするので、掃除自体に抵抗はないと説明すると複雑な顔でうなずいていた。

笑い話のつもりで、受付の仏人女性に「凄くびっくりされたのよ」と言うとこれ又「あなた達自分で掃除するの？」と目を丸くされてしまったので、こっちがびっくりした。

そういえば日本のバラエティ番組で、仏の幼稚園の先生が日本の幼稚園を訪れた時、園児達が掃除をしているのを見て「私には罰を与えてるとしか思えない」と言ってったっけ。仏の子供がゴミをポイ捨てするのを見て「捨てちゃダメでしょ」と注意すると、肩をすくめ「掃除夫が拾うでしょ」と返された事がある。オリンピックやスポーツの W 杯などで、日本人観客が観戦後、ゴミを拾うと世界中から驚かれる。どうも日本が特別なようだ。
昔は我が職場でも掃除を外注していたらしいのだが、時々冷蔵庫の瓶ビールの中身が水になっていたらしい。笑い話で済んだけれど、見知らぬ人に鍵を託すのだ、自分達でやった方が安心だと思うのだが…。

パリでは日本から派生した「グリーンバード」という日本人主導で月に一度ゴミを拾う会があるらしい。一度参加してみようかしら？

まりさんのパリ通信（21）　（2020.11）
職場での出来事②

パリまり（パリ在住）

地下の駐車場に降りて行ったら、ちょうど通り道に警官が男 2 人を壁に押し付けていた。「多分駐車している車を狙った泥棒が捕まったんだろう」と思い、一瞬引き返そうかどうか迷った。男達が抵抗したら警官は銃を抜くかもしれない。しかし、パリに長く住んでいると危険感知のセンサーが鈍る。戻って再度降りてくる面倒臭さが勝って「パルドン」と言いながら取り込み中の警官の後ろを通って行ってしまった。

「この前のテロの犯人がとなりのマグドナルドに逃げ込んでいたんだって」、「そこのルイヴィトンに強盗が入って今逃走中らしい」、「昨夜裏の通りで銃撃戦があったらしいよ」。「いつもお昼を買いに行く店の近くでドライバーと通行人が口論になって、怒ったドライバーがナイフで通行人二人を刺したんだって。車に乗っていた子供も含めて全員女性だったらしいけど、ドライバーは阿片を使用していて、刺された通行人の重症の方がコカインで、軽傷の方が大麻をやっていたんだって。なんか同情しにくいよね。」etc…
職場周辺は何かと騒がしい。
先日の「表現の自由」を教えたがために、首を切断されて殺された中学校の教師のテロ事件はさすがに大事件となったが、ニュースをチェックしている仏人の同僚は「テロ（「アラーは偉大なり！」と叫んで人を襲うとイスラム過激派のテロとみなされる）が起きたけど、死人が出なかったから別にいいか」と言うようになった。しょっちゅうありすぎていちいち取り上げていられないらしい。（フランスでのナイフでの事件は約 120 件／日）
何だかなぁ。

まりさんのパリ通信（22）　（2020.12）

2度目のロックダウン

パリまり（パリ在住）

フランスが 2 度目のロックダウンになってから 1 ヶ月近くが過ぎた。
11 月 24 日夜のマクロン大統領の TV 演説に多くが注目した。規制緩和の条件によって、生活が一変するからだ。
発表時点での 24h 内の死者が 1000 人以上と、まだまだ予断を許さないところではあるが、入院患者数と集中治療室における病床数にコロナ患者が占める割合が少し減少したことから第 2 波のピークは過ぎたと見たようだ。

結果、3 段階の緩和措置が発表された。11 月 28 日の土曜日から散歩、運動等の目的での外出は、自宅から 20 キロ圏内において 3 時間まで認められるようになった。商店は 21h に閉店することを条件に営業が認められた。これは年間売り上げの多くを占めるクリスマス商戦の時期に、店舗閉鎖を続けると暴動も起こりかねないからかもしれない。

第2段階は感染者、蘇生病床の患者数が管理目標に達したらという条件付きではあるが、12 月 15 日から外出制限が解除され、クリスマス休暇には地域間の移動が可能となり、映画館、劇場、美術館も再開出来る。文化は我々の暮らしには不可欠であると言う訳だ。
夜間外出禁止措置は続くが、大切なクリスマスの集いの 12 月 24 日及び 31 日は公の場での集会以外は、自由に行動することができるとされた。

第3段階はクリスマス期間中の感染が抑えられたかどうかを確認してから、更なる緩和措置は 1 月 20 日より導入することになっている。

最後に大統領は「この期間、我々の価値、歴史、民主主義、過去同様に今日も我々の最も強みであるヒューマニズムの下、共に頑張ろう。我々は新たな未来を切り開くことができるだろう。この疫病を打ち負かし、テロや気候危機に立ち向かわなければならない。団結し、共に勝利を手にしよう。フランス万歳、共和国万歳」と締めくくった。

まりさんのパリ通信（23）　（2021.1）

コロナ下の年末年始

パリまり（パリ在住）

予定では、12 月 15 日からロックダウン大幅緩和がされるはずだったフランスだが、感染者数が思ったより減らず、予定より厳しい処置が取られた。
日中の外出制限は無くなったものの、20h から 6h まで夜間外出禁止となった。24 日の夜だけは外出が許されたが、大晦日は他の日と同じく 20h 以降は家にいなければいけなくなった。劇場や美術館の再開も 1 月 7 日まで延長された。

クリスマス前の買い物に多くの人がどっと街に溢れて、年明けの感染拡大が心配されている。新型コロナウイルスの変異種も英国から入ってくるのは時間の問題だと言われている。
マクロン大統領自身も感染し、ベルサイユの官邸で自主隔離となった。
あまり明るいニュースがないようだが、だからと言ってワクチンに希望をかける仏人はそう多くはない。政府は出来るだけ早く年末から、最初は高齢者施設の入所者や職員に、次いで、他の高齢者や医療従事者、それ以外の市民にと 3 段階で接種を予定しているが、当初の計画よりも遅れが出ている。

臨床試験の期間が短すぎる事、副作用への懸念からワクチン接種反対派も多く、10 月に IPSOS と世界経済フォーラムが 15 か国を対象に行った調査では、仏は「ワクチンを接種する」と答えた人は 54%で最下位だったそうだ。
先日、政府が国会に提出した「衛生非常事態の管理に関する制度」法案に、「ワクチン義務化」を思わせる規定が含まれていると批判の声が上がり、ベラン保健相は事態の沈静化のため、同法案の審議をしばらく延期すると発表した。仏人は強制には断固反対する人たちである。
マクロン大統領もワクチン接種の義務化はしないと公言している。

まりさんのパリ通信（24）　（2021.2）

職場での出来事③

パリまり（パリ在住）

我が職場にはたまに変わった人がやって来る事がある
昔、一人の女性が「ちょっと聞いて下さい。」と興奮してやって来た。
どうもその日の朝、空港に到着してからタクシーで市内に向かっている途中、信号待ちで止まったところ、工事作業員の様な格好をした男が近付いて来て、車の窓を破り座席に置いてあったバッグを持ち去って行ってしまったらしい。
同情はするが、来る所を間違えているような気がする。
お茶を出して話を聞いた後「それはお気の毒に大変でしたね。警察に盗難届を出してから大使館に行って、パスポートの再発行を依頼された方がいいですよ。」とお引き取り願った。

別の時には和装姿の白髭の男性がやって来たので、何か日本の伝統芸能関係者かと思い応接コーナーにお通しする。
話し始めると「ローマから歩いて来ました。もう 3 日も何も食べていません。着替えもないし…」と窮状を訴える。『しまった！』思ったがもう遅い。彼は「亡命希望届」と書いた用紙を取り出してこちらに見せる。ぎっしりと書き込まれた内容は『キリストが…宇宙がどうのこうの』とある。そして彼は「これを持ってポーランド大使館でスイスへの亡命を申請します。」と言う。
こちらは頭の中で整理する。『イタリアのローマから歩いてフランスのパリに来て、パリのポーランド大使館にスイスへの亡命を申請するわけですね。』好きにしてくれていいのだが、「こちらでは何も出来ません」だ。

「どうぞお納め下さい」と亡命申請書を差し出される。いらないのだが「でも、それしかないし」とも言うのでコピーを取って、オリジナルをお返しし「（留守の）上司に見せておきますので」とお帰り頂く。「明日もう一度来ます」と言われ頭を抱える。翌日いらっしゃった時には言葉の通じない仏人の同僚に対応してもらい事なきを得た。
（筆者はパリでメディア関係の職場に勤めておられます。編集委員）

まりさんのパリ通信（25）　（2021.3）

フランスの大学生救済政策

パリまり（パリ在住）

フランスでは現在、長期の学校閉鎖で孤独を感じて鬱になったり、アルバイトや仕送りの激減で経済的苦境に陥っている学生が増えている。

その救済策の一つとして、大学などの食堂で1ユーロ（約127円）で食事が提供されている。

新学期にあたる9月から奨学生に対して行われていた措置を、登録が必要だが、1月25日から全ての学生対象へと広げたのだ。

本来3.3ユーロ（約420円）の食事が1ユーロになった。夜間外出禁止令により、昼食用と夕食用の2つの食事を同時にテイクアウトすることができる。場所によってはとても長い列が出来ている所もある。これにより１日最低2食が確保出来る事になり、多くの学生達が救われている。

この他にも奨学金の権利の改訂、緊急援助、雇用創出、健康相談のためのプラットフォーム作成、精神的に辛い場合など精神科医らに相談する際の費用も補助するなどの対策が次々と打ち出されている。
その他、大型スーパーが協力して、2月末までに2ユーロ未満で必要な物を詰め合わせた「学生バスケット」を提供する計画もある。

知り合いの大学生にテイクアウトの学食のセットメニューの写真を見せてもらった。なかなか美味しそうに見えたが、彼らによると場所によって当たり外れがあるようだ。
「みんな集まってわいわい騒ぎたいだろうに、出来なくて可哀想ね」と言うと「そうなんですよ、（18h-6h迄の外出制限のせいで）18h迄に集まらなきゃならないし、そこから朝6時迄帰れないんですよ。（=12時間も集まっている）」と返ってきた。彼らはなかなか逞しい。

まりさんのパリ通信（26）（2021.4）

ワクチン騒動

パリまり（パリ在住）

仏では３月 20 日からパリ首都圏を含む 16 県にあらたな外出制限が出たが、中途半端なロックダウンとなり、外出証明の複雑化など国民から不満の声が上がっている。それと同時にアストラゼネカ社製のワクチンの取り扱いが迷走している。

このワクチンは２月末に接種が始まったが、それより先にマクロン大統領が「65 歳以上の人には効果がないとみられる」と発言。３月１日、保健相が「65～74 歳の人を含め、併存疾患のある人はアストラゼネカのワクチン接種を受けられる」と方針転換し、積極的に推進したが、欧州で接種後に血栓症を発症、死亡したケースが複数報告されたため、３月 15 日には使用一時中断となった。
３月 19 日にフランス保健当局が接種再開を承認しつつも、55 歳未満に血栓発症例があることから、対象を 55 歳以上に限定するよう推奨した。
この数時間後には、同ワクチンに対する国民の信頼を高めるために 55 歳のカステックス首相がアストラゼネカワクチンの接種を受ける様子が、テレビで生中継された。しかし、これだけコロコロ発表が変わると、医療関係者含め多くの人がアストラゼネカ社製を避けるようになってしまっている。今の時点では誰も今後の予測がつかない状況だ。

早まって（？）3 月の初めに、まだ順番が来ていないのにフライングをして、アストラゼネカのワクチンを接種した同僚がいる。希望者が少なくて余っていたのだろうか、行きつけの Dr に「打ちたかったらやってあげるよ」と言われ飛びついたらしい。接種後 10 分で打った方の腕が冷たくなり、２日程微熱があったという。２週間半経った後も腕の一部分に鋭い痛みを感じる事が時々あるらしい。

一時中断となった時に「2 回目の接種どうするの？」と聞くと 55 歳以下の彼は「c ‘estunebonnequestion（いい質問だ）」と頭を抱えていた。

まりさんのパリ通信（27）（2021.5）

隣は何をする人ぞ

パリまり（パリ在住）

数年前、私が以前住んでいた高層アパートの部屋のインターフォンがよく鳴るようになった。
基本的に配達か知人が来る時以外は出ないようにしていたのだが、直接上がって来た人が、私の部屋のベルを押す時もあった。覗き穴から見るとアジア人、白人、アラブ系、黒人と全ての人種の男性だった。知らない人だと返事をしないか、ドアを開けずに「どなたですか？」と聞いていたが、全員が「間違えました」と言うか無言で去って行く。ある日、つい開けてしまうと若いフランス人の男性が「Bonjour」と言う。こちらが「何か御用ですか？」と聞くと、おどおどしながら結局「間違えました」と行ってしまった。「何かおかしいな？」と思い出した頃、早朝にインターフォンが鳴った。余りにも非常識な時間に何度も鳴るので「何時だと思っているのよ！」と怒鳴って切ると、又すぐに鳴らしてくる。「何なのよ！」と再度怒鳴ると「開けるのか、開けないのか？」と言われ、ゾッとして「警察を呼ぶわよ！」と叫ぶとそのまま切れた。

あまりにもおかしいので管理人に相談に行ったが、メインの管理人はバカンス中、代わりの管理人は分からないと言う。セキュリティの人に相談して事情が分かった。
パリのあちこちのアパートで違法に行われている怪しいマッサージ店が、うちの隣の部屋でも行われていたのだ。
そういえば、その半年程前にも区役所からのお知らせのビラに「この区内の違法マッサージ店 8 件を摘発し、関係者数人を逮捕しました」とあったっけ。幾ら潰してもいたちごっこの訳だ。

私が住んでいた大型高層住宅には 300 軒ほどのアパートが入っていたため、地上階の入り口が 2 つに分かれていた。中では一緒になるのだが、その 2 つの入り口にそれぞれインターホンが付いている。そして私の部屋と隣の部屋のコード No が一緒だったのだ。怪しいマッサージを受けに来た客？はコード No だけ聞いて来るのだろう。しかし、入り口 2 つあるので、分からずに私の部屋のインターフォンを鳴らす輩もいたと言うわけだ。全く迷惑極まりない！

バカンスから帰って来た管理人さんに事情を聞くと、なんでも私の隣のアパートを借りた中国人の学生がそれを又貸しして、そこで違法マッサージが行われていたらしい。もうすでに大家に連絡して 2 ヶ月後には契約解約となることが決まっていると教えてくれた。それを分かっていてすぐに止めさせない管理組合も管理組合だが、「迷惑受けてるんだったら訴える？」と聞かれ「うーん、後

2ヶ月で出て行くのが分かっているんだったら、面倒臭いんでいい」と答える私も私だ。結局、それまでの2ヶ月間インターフォンを切ってくれると言うことになり終結した。

友人に「全くうちの地域は」と嘆くと「地域は関係ないぞ、16 区の高級住宅街にもたくさんあるぞ。ある日いきなり隣のアパートが違法マッサージ店になってる事は誰にでもあり得る」と慰めてくれた。
そういえば昔女性スキャンダルで失脚した元大統領有力候補だったストラスカーンの行きつけの「怪しいアパート」はオペラ座近くのパリ中心だったっけ。
日本人街の真ん中に引っ越せたと喜んでいた友人は、同じ建物の地上階が合法的なれど、とっても怪しいお店で「子供に説明できない」と苦笑いしていた。
まあ、パリにいると色々あるものだ。
（写真は筆者のお住まいではありません。編集委員）

まりさんのパリ通信（28）　（2021.6）
職場での出来事④

パリまり（パリ在住）

廊下にある女子 WC に入ったところ、個室の中から見慣れない男性が出てきた。「ここは女子トイレですよ」と伝えたが、何も言わずに出て行った。
不審に思い警備員に伝えると、慣れたように一緒に上がってきて便器の上に立ち、天井の戸板を拳骨で一撃した。簡単に外れた戸板からは財布が 5、6 個バサッと落ちて来た。どうやらスリの隠し場所になっていたらしい。もちろんお金は抜かれた後だ。

週末の受付のいない日、ロビーのカウンターの後ろに見知らぬ女性が立っていた。お掃除の人かと思い「ボンジュール」と声をかけるが返事がない。あまり気にもせずに通り過ぎたが、再度下に降りた時に彼女がソファーで横になっていたので、浮浪者だとピンと来た。まだ若いのに気の毒には思うが、先程カウンターでゴソゴソしていたのも気になる。お菓子とジュースを差し入れて「ここにいちゃいけないのよ。私は警備員にあなたが追い出されるのを見たくないから一緒に出ましょう」と誘う。付いて来てくれるかと思ったが「私はお家に帰りたいの」と言ってエレベーターの方に行こうとする。可哀想に、精神的に少し不安定になっているようだ。「ここはオフィスビルだから誰も住んでないのよ」と促して何とか外に出てもらった。

以前にも週末、事務所のドアの手前の廊下に横になって寝ている人がいた。寒いので暖房の効いているビルに入り込んで寝ていたようだった。廊下に縦になって寝ていてくれれば横をそろっと通り抜ける事も出来るのだが、廊下の幅横一杯になって寝ているので無理だ。
「すみません、ムッシュー」と言って彼を跨ぐべきかどうか一瞬考えて、やはり警備員に言いに行った。再び上がって来た時には気配を察したのか姿は消えていた。

まりさんのパリ通信（29）　（2021.7）

漫画パス？

パリまり（パリ在住）

仏では文化省が「カルチャーパス」というものを導入した。18才の若者に有効期限２年で、300 ユーロ（約４万円）相当の「商品券」を政府がプレゼントするというものだ。これはコンサート、劇場、オペラ、映画のチケットなどや、演劇、音楽、歌、絵などのレッスンの他、本、CD、DVD、楽器、芸術作品などの購入に使用できる。
若者を広く文化に触れさせようとする素晴らしいアイデアだとは思う。

デジタルサービス（電子書籍、ビデオゲーム、映画ストリーミングプラットフォーム、etc）などには 100 ユーロの支出制限を作って、全ての金額をビデオゲームなどに使用しないように考えたのではないかと想像するが、まだ穴があった。漫画だ。
仏は欧州で最も日本のアニメやマンガの盛んな国で、多くが仏語に翻訳されている。

パスの導入以来、この漫画が爆発的に売れている。
書店によると人気漫画をまとめて注文する人が多くいるという。若者にすれば一冊 900 円程する「ONEPIECE」や「進撃の巨人」などの長編漫画を何十巻もまとめて購入出来るので、これほどありがたい話はないだろう。

政府は「漫画を購入する若者は他の本も同時に注文しているケースがある」と苦し紛れに言っているが、思惑とは違った方向に行ってしまったと思っているのではないだろうか。

パスの名前を「カルチャーパス」ではなく「漫画パス」にした方がいいのではないかという声もある。

まあ、漫画も”ポップ”カルチャーではあるし、素晴らしい作品もある。
日本の漫画を原語で読みたいと日本語を習い出す人も少なからずいるし、漫画で見る日本の生活に興味を持ち「いつか日本に行ってみたい」と夢見る若者も多い。
漫画が広く仏に浸透して行っているという事は、日本人としては喜ばしい事だろう。
（右上写真<拡大>は本文とは関係ありません。まりさんから送っていただいたアラン・ドロンの近影です。編集委員）

まりさんのパリ通信（30）　（2021.8）
宮殿ホテル？

パリまり（パリ在住）

ベルサイユ宮殿の敷地内に 6 月、高級ホテル「LeGrandControle（（ル・グラン・コントロール）」がオープンした。
コロナのせいでオープンが遅れたが、計画が発表された時は大きな話題になっていたので、ちょっとのぞいてみた。
宿泊料が一番安い部屋でも 1500 ユーロ（1 ユーロ約 130 円）、高い部屋になると 1 万ユーロ以上と庶民には手の届かない値段だ。宮殿営業時間外に鏡の回廊を含む様々な場所に訪れる事ができるという、なんとも贅沢なオプションが含まれ、各部屋に専任のバトラーがつくらしい。

「こういう所に出入りする客層の人は値段なんて気にしないんだろうな」と思いつつ、恐る恐る 18 世紀の衣装に身を包むレセプショニストにアフタヌーンティーの値段を聞いてみる。52？とそれなりの値段だったが、手が届かないというわけではない。「（ロックダウンで）半年以上もレストランに行っていないのだから」と自分に言い訳をして予約をする。名前を伝えるとこちらの電話番号を言われる。「何故私の電話番号がわかるの？」と聞くと「以前、パリのムーリスホテルのレストランに行かれていますね。同じアラン・デュカス（仏の有名シェフ）のグループなので記録が残っています。」と言う。何年も前にランチで一度行っただけの記録が残っているとは！お洒落なプライベート侵害である。

観光客もまだ少ないので、ほぼテラスを独り占めだった。『予約いらんやん』と呟きつつ、リモージュの食器にピュイフォルカの銀器で贅沢なひと時を過ごす。
ホテルを出る時に門番が「Aurevoir（さようなら）、Madame」の後に私の名前を言ったのに、又びっくりした。さすが一流ホテルのサービスではあるが、「会計を済ませる頃にサービス係が門番

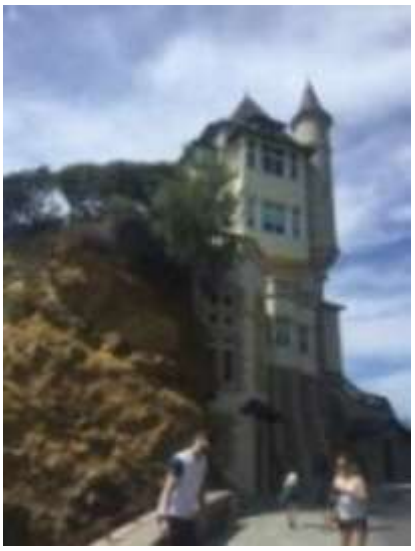
に『もうすぐ、布バッグを持った小さいアジア人が出て来るぞ、名前は XX だ』などと伝えているのだろうな」と裏読みして少々興醒めしている私、性格悪いかしら？

まりさんのパリ通信（31）（2021.9）

フランスのバカンス①

パリまり（パリ在住）

パリから殆ど動かない生活から 1 年 8 ヶ月ぶりにバカンスを取った。
とは言え事は簡単でない。今仏では衛生パスなるものが導入され、ワクチンを接種していない人は PCR か抗原検査を受けて、陰性証明書を提示しないと長距離移動の列車や飛行機に乗れないし、レストランや美術館にも入れない。ワクチン強制接種に政府が舵を切ったと見た反対派が、毎週デモを行い、テストの有効期間が 48 時間から 72 時間に延ばされたが、それでも 3 日に一度テストを受けなければ普通の生活が送れない。数人でバカンスに出るとワクチンを打った人は自由に動けるが、パスを持っていない人は行動をかなり制限されるという不都合が生じる。「自由、平等、博愛」の国のはずの仏がこれでは「自由、平等の迫害」だと文句を言っている。



今回は南西仏のバスク地方でのんびりと過ごした。最初は海岸沿いの街ビアリッツ、ここはナポレオン3世の妃ウジェニー皇后のお気に入りだった地で、1854 年から 1868 年まで毎年のように皇帝夫妻が訪れていたそうだ。夏にはフランス宮廷がこの地に引っ越して来たと言われた程栄えた場所である。私もここが好きでもう 20 数回は来ている。いい波が押し寄せてくるのでサーファー達も集まり、世界的な大会も行われる。海岸線の向こうにはスペインが見える洗練されたリゾート地である。いつもなら国境を気にせずに、簡単にスペインの美食の街サンセバスチャンまで足を延ばすのだが、今回は手続きが面倒臭いのでパスした。（続く）

まりさんのパリ通信（32）（2021.10）

フランスのバカンス②

パリまり（パリ在住）

ビアリッツで満ち潮時の波かぶりやどこまでも続く海岸線の散歩を楽しみ、人気のレストランで持ち帰りタパスとカモメ用にバゲットを１本購入し、海辺のベンチでランチ。その後、お気に入りの場所である灯台の下の崖から海を眺めようとしたのだが、残念ながら今回は封鎖されていた。高波や強風の時には事故が起こるからだろう。

以前友人と来た時、彼女に「ほら、ここに戦時中の砲台跡があるよ」と崖の下を指差した。身を乗り出して見た彼女は次の瞬間「あっ！」と叫んで後退りし「頭が痛い」とうずくまった。何でも黒い煙のようなものが彼女に向かって飛んできたらしい。私自身は何も感じないのだが、周りには目に見えないものを感じたりする人は何人かいる。彼女もその一人だ。「あらら、やっちゃったね」と相談して、教会で聖水をつけてみようということになった。信者でも何でもないが、苦しい時の神頼みだ。教会に向かう間、彼女は時々後ろを向いて何度も「あっち行け、あんたなんかいらないよ」と言う。なかなかシュールな世界だ。聖水を付けた後は少し楽になったらしい。本当にご利益があるのかしら？

その時に滞在した海岸沿いの小さな部屋からは、ガラス戸にぴったりベッドを置くと目覚めた時、視界に海が飛び込んで来るという、まるで海と添い寝しているような感覚を味わえた。当然２人共お気に入りで、そのベッドを取り合っていたのが、その後彼女は「窓際だと例の灯台が見えるので嫌だ」と言って奥のベッドを選ぶようになった。私がほくそ笑んだのはお分かりいただけるかと思う。（続く）

まりさんのパリ通信（33）（2021.11）

フランスのバカンス③

パリまり（パリ在住）

小さな村々を通りながら、今回の宿であるバスク地方の山の中にある昔の水車小屋に到着。家の下には小川が流れ、それがダイニングの足元の窓から見え、せせらぎの音が聞こえる。家の中には大きな石臼（？）が2つ鎮座していた。家の周りは緑しかない。村の中心まで歩いて30分はかかるだろうという、ポツンと1件水車小屋だ。なだらかな山歩きのついでに野生のラズベリーやりんごを収穫。パリで高い Bio のりんごを買うのが馬鹿らしくなる。食卓にはこれらのフルーツや製造元に寄って購入した、3つ星レストランからも注文を受けるという羊のチーズも食卓に並べる。もちろんこの地方でチーズに付けて食べるブラックチェリーのジャムも欠かせない。

パリで日本人が包丁研ぎをやっていて、そこに頼んで包丁を研いでもらった仏人の家庭では（切れ過ぎて）怪我人続出という笑い話の後に、仏人のパンやチーズの切り方を教えてもらう。映画などでよく見る大きな田舎パンを抱え、包丁の刃を自分の方に向けて切るやり方だ。刃が自分に近付いて来るのを怖がっていると「仏のナイフは切れないから大丈夫だ！」と変なアドバイスをしてくれる。チーズも「耳の硬いところを切らずに残しておくと奥さんに怒られるんだよね」と男性陣の意見が一致するのがおかしい。楽しい会話に楽しい食事、食が進みすぎてちょっと困る。

夜は庭に椅子を出し、満天の星を観て流れ星に歓声をあげる。天国天国。翌日車で山頂に行くと羊の群れに遭遇した。もちろん道路は羊優先で、車は途切れない羊の行列を忍耐強く待つ必要がある。結構な斜面が多いので羊も脚を踏み外すのか、脚を引きずって歩く羊率が高かった。仔羊に乳をやるお母さんの横には羊飼いがいる。ひと昔前に戻ったような風景だ。こうして大自然の中でのんびりと過ごしていると生き返った気がする。

さて、そろそろ現実に戻りますか。

まりさんのパリ通信（34）（2021.12）

偽陽性

パリまり（パリ在住）

フランスでは 10／15 から有料になるまでは、割と手軽に Covid-19 の抗原検査を受ける事が出来ていた。薬局などが店の前にテントを出して、道ゆく人も気軽に立ち寄り、数分で検査を受ける。検査後 15 分～30 分程で登録したスマホに結果が送られてくる。これが衛生パスとなり、陰性であれば、カフェや映画館、美術館、病院 etc に行けるというわけだ。
私もこれをよく受けていたが、抗原検査の精度からいって、何度も受けているといずれ陽性反応が出てしまうだろうなという危惧は持っていた。

そして、ある日当たり（？）が出た。検査後「陽性です」と通知が来て、それが保健所に連結しているので、電話がかかって来る。「10 日間の自宅待機をして下さい。濃厚接触者がいたら教えて下さい。」と言う。もうすでに職場関係の人には即検査を受けてもらい、みんな陰性だったので一安心。それを報告し、ついでに症状は何もない事も伝える。すると「抗原検査は精度が低いので PCR 検査を受けて下さい」と言われた。数日後、訪問看護師が二人うちにやって来た。扉の前で完全武装し始めるので「この様子をもし隣人が見ると、私は危ない人になるのね」と苦笑。本人はかかった気がしていないので、看護士に伝える。抗原検査の精度はなんと 50～60%だそうだ。ロシアンルーレットみたいだ。どうしてそんな検査を受けて証明をしなければ普通の生活ができないのか疑問が残る。その場で再度、抗原検査と PCR 検査を受ける。案の定、すぐに結果の出る抗原検査は「陰性」。「やっぱりね」と思い、「じゃあ、もう仕事に行っていい？」と聞くと「PCR の結果が出るまで待ってね。それが陰性だったらもう自宅待機終わっていいわよ」との事だった。その夜、送られて来た検査結果は「陰性」、無事無罪放免（？）となった。
これから抗原検査の事を「数打ちゃ当たる検査」と呼ぶことにしよう。

まりさんのパリ通信（35）（2022.1）

ひったくり①

パリまり（パリ在住）

家のすぐ近くでひったくりにあった。パリ全域で治安の悪化は著しいのだが、私の住んでいる所でも不良達が集まる地下駐車場がすぐ近くにあり、ドラッグの売買なども行われているらしい。

迂闊にもルイ・ヴィトンの紙袋を持って歩いていたので、狙われたようだ。

それも自分が購入したわけでもない、人からお菓子か何かをもらった時に、たまたまその紙袋に入れてくれただけのものだ。中に入っていた物も泥棒が悔しがる程価値のない物だった。むしろ警察に届けて中身を聞かれ「お茶漬けの素 2 袋、温泉の素 1 袋、アイマスク 1 袋、空の使い捨てのプラスチックのパック」なんて申告する方が恥ずかしいではないか。というわけで、私的にはその場で終わったことにしたかったのだが、事はそう簡単ではなかった。

泥棒が私から紙袋を引ったくった後、逃げようと振り返ったところに別の通行人がいたのだ。近くの小学校で教師をしているというインド系の彼女は、勇敢にも私の紙袋を取り返そうとしてくれたのだ。振り返った私に見えたのは黒人の男と揉み合う紙袋を抱き抱える小さな女性だった。泥棒は彼女の頭を殴り、紙袋を持って走り去った。彼女の無事を確かめ、お礼を言って別れるはずだったのだが、目撃者のおじさんがやって来て「俺もこの前やられたんだ。警察のパトロールを強化してもらうためにも絶対被害届を出せ！」と力説する。

そこで彼女が警察に電話をし、パトカーを待つ。到着した警官達に「そこの駐車場に逃げて行った」と状況を説明した。警官達が、駐車場の入り口に近付くと、そこに屯していた若者達が蜘蛛の子を散らす様に去って行った。やれやれ、みんな「やばい奴」らしい。

まりさんのパリ通信（36）（2022.2）

ひったくり②

パリまり（パリ在住）

パトロールの警官達にも「被害届を出してね」と言われたのと、殴られた女性が「後で（殴られた頭に）問題があった時のために証拠を残しておきたい。それに私達が警察を呼んだのを彼らが見ていたから、仕返しされる恐れがある」と言うので、地域の警察署に被害届を出しに行く。夜の 8h だったせいか係の警官の数が少なく 2～3 時間は待つと言うので、翌朝出直すことに。ああ、面倒臭い。

翌朝、再度彼女と待ち合わせして別々に被害届を出す。隣の部屋でそれぞれ調書を取られ、それが聞こえて来るので違いがよく分かって面白い。彼女の方が犯人の特徴をよく覚えているし、説明も上手だ。話を聞いてくれる警官も私の方は親切なのだが、少し手抜きで、ふんふんと話を聞きながら調書を作り、印刷したそれを持って来て「はい、これにサインして」でお終い。隣の警官は作り上げた調書を読み上げ、申告内容に間違いがないかを確認している。今回は被害者の立場だからいいものの、万が一加害者の立場に追いやられたら、調書はしっかり読み上げて貰い、自分もしっかりと目を通そうと思った。

翌日、警察から電話があったので「もしかしたら紙袋が見つかったのかしら？」と思いつつ、指定された時間に行く。受付の女性に「BEI という部署に呼ばれた」と伝えるが、係に繋がらない。45 分待って、もう帰ろうかと思い出したところ、担当者から「まだ来ないの？」と電話があった。「時間前に来て受付で 45 分待っている」と伝えると悪びれずに「あら、そう」と迎えにおりて来た。
担当者が見つからず散々待たされている間も「今、メトロでクレジットカード 2 枚と保険証、運転免許証、財布と現金をすられた！」と駆け込んでくる人がいた。全ての再発行の手間を想像しただけで、他人事ながら気の毒過ぎて、こっちまでうんざりする。対面調査は「犯人の写真を見たらわかる？」等の質問を 2～3 されて終わる。こんなケースは日々何百件もあり、犯人は十中八九捕まらないのだが、「一応きちんと書類は作るんだ」と仏警察に期待はしていなかったので、その点ではいい意味で驚きだった。でも、もう見つからなくていいから、呼び出さないでね。

まりさんのパリ通信（37）（2022.3）

「何かがおかしい」

パリまり（パリ在住）

凱旋門と「10分で結果でます」と書かれた抗原検査用テント

1 月にマクロン大統領が「emmerder」（くそくらえ）という下品な言葉を使って、「ワクチン未接種者の生活を困難なものにしたい」と発言したことに我が耳を疑った。一国の大統領が言う言葉だろうか？その後しばらくしてワクチンパスポートが発行された。未接種者にはさまざまな事が禁止され、差別されている。「接種したい人はする。希望しない人はしない。選択の自由があって当然。それぞれを尊重する。」「自由、平等、友愛」を掲げているフランスでこれが出来ていない、なんということだろう。

こちらでは 2 回打とうが 3 回打とうが、みんなバンバンかかっている。多い時には 1 日 42 万人以上がかかっていた。接種した人が 80%を超えているのにだ。未接種者が感染を広げるという説はもう通用しない。

日本人では聞いただけでも、パリの有名レストランのソムリエをしていた方が、3 回接種していたにも関わらず亡くなられた。又、32 歳の男性は 3 回目のワクチン接種後、体調を崩し 3 日後に亡くなられた。ワクチンに対しての不信感が募る。欧州医薬品庁（EMA）のワクチン戦略部門の責任者が「頻繁なブースターショットは人間の免疫体系に否定的な影響を及ぼしかねない」と言ったにも関わらず、政府は「打て打て」の一点張り。むしろ期間をどんどん短くしてくる。以前は前回接種から 7 カ月以内にブースター接種を実施することが、ワクチン接種完了とみなされる条件としていたが、2 月 15 日以降、この期間を 4 カ月に短縮し（これを過ぎるとワクチンパスの権利を失う）、今では 3 ヶ月経てば再接種出来る様にした。

「何かがおかしい」

これだけの人数が打ったのにワクチンによって状況が良くなっているわけではないことに、そしてワクチン接種後に後遺症で苦しんでいる人や、亡くなる人が出て来ていることを、一旦冷静になって考えるべきではないだろうか。

まりさんのパリ通信（38）（2022.4）

「ほんまかいな！！」

パリまり（パリ在住）

騙し絵のカバーをかけた
工事中の建物

昔、パリの街を母と一緒に歩いていた時のこと、道端に座っている浮浪者らしいおじいさんの前をおしゃべりしながら通り過ぎた。よくある風景なので何も気にせずに歩いていたのだが、数 m 程離れたところで、そのおじいさんが後ろから私にいきなり殴りかかって来た。母より私の方が小さかったから狙われたのだろうか？
びっくりした後、猛烈に怒りが湧いて来て、こちらも戦闘態勢に入った。持っていたランセルのバッグを思いっきり彼にぶつける。勢いが強すぎて持ち手のベルト部分が外れた。後日談だが、修理のためにランセルの本店に持って行ったら無料で修理してくれた。流石一流ブランドだ。しかし、あくまで本来の使い方で壊れた場合の無料修理だろうから壊れた理由はもちろん黙っておいた。

戦っている浮浪者と私の間に通行人の男性 2 人が止めに入り、おじいさんを羽交い締めにしてくれた。そこで止めればいいのに、つい抵抗出来ないおじいさんに一発お見舞いしてしまった。人間怒り心頭になるとどうも歯止めがきかない。
男性二人にお礼を言って再び歩き出したものの、ふと、疑問が湧いて母に聞いてみた。「ねえねえ、私がおじいちゃんに襲われている時に、ママは何しとったん？」すると母は「うーん、私も『何で助けに入らんかったんやろ？』とさっきから考えててんけど、『まあ、我が娘は果敢に戦っているし、相手がナイフでも持ってたら身を挺してでも助けに入ったと思うねんけど」と言った。

「ほんまかいな！！」

まりさんのパリ通信（39）　（2022.5）

裁判

パリまり（パリ在住）

パリのアルベール・カーン博物館にある
日本庭園の茶室

2016 年 12 月にフランス、ブザンソン留学中に行方不明になった黒崎愛海さんの事件で、彼女を殺害した容疑でチリ人の元恋人、ニコラス・セペダ容疑者の裁判が 3 月の末から 4 月にかけ、2 週間にわたって行われた。フランス－日本－チリと 3 ヶ国にまたがったこの裁判は 6 人の通訳を介し行われた。事件後、チリに帰国していたセペダ容疑者は日仏チリ間に、犯罪人引き渡し条約がない事からフランスへの送還はないと踏んでいたようだが、仏側の多大なる努力のおかげで、2020 年にチリ最高裁判所が引き渡しを決定し、その年の 7 月からブザンソンに勾留されていた。

裁判中、次々と出て来る証拠に、最後は被告側の弁護士も弁護しきれないと思ったのか、自白を勧める発言をしたにもかかわらず、被告は一貫して「自分はやっていない」と無実を訴え続けた。

来仏された愛海さんのお母さんと妹の血を吐くような訴えに、法廷では傍聴席の人達や記者でさえ涙を抑える事が出来ず、通訳の声も震えていた。話が終わった後は、普段なら考えられない事だが傍聴席から拍手が起こった。

裕福な家庭出身の被告はチリでも仏でも一流の弁護士を雇い、一方黒崎家には金銭的余裕がなく、渡航費や弁護士代にも事欠く中、なんとか愛海さんの遺体を見つけ出し、埋葬してやりたいという一心で、周囲の寄付などの援助を受け、今回の裁判を迎えたのだが、結局被告がそれを告白する事はなかった。

お母さんと妹がせめてもの気持ちをと法廷に応援に来てくれた人達に、自分達で折った鶴を渡したという。現地のメディアは「小さなことですが、大きな意味があります。とても暗い裁判の中に、優しさと彩りを添えてくれました。」と報道した。

下った判決は懲役 28 年、セペダは翌日に控訴した。

まりさんのパリ通信（40）　（2022.6）

事務所での出来事⑤

「今朝、仕事に来たらこんな事が起こってました」

パリまり（パリ在住）

警察官が不審者のﾎﾞﾃﾞｨﾁｪｯｸをしている日常の風景

朝出勤時、事務所ビルの前に人が屯していた。一瞬、「避難訓練？」と思ったが、どうも違うらしい。
建物に入ると、男性が二人丁重に挨拶をしてくる。受付嬢が「この人は別の会社の方です。」と言って通して貰えた。同僚が出勤して来て初めて、同じビルの大手コンサル会社に監査が入った事がわかった。受付前にいたのが司法警察官で、外にいた人達は入れて貰えなかったコンサル会社の社員達だったのだ。

この会社はマクロン大統領とも懇意にしており、政府から多くの発注を受け、莫大な報酬を手にしていたが、過去10年間一度も納税していなかったらしい。

きっかけは英国や米国のコンサルティング会社の政府への影響力が強まっている事を警告する「LesInfiltres（潜入者）」という告発本だった。その後、上院調査委が、3月にマクロン一期目に大手コンサルへの政府支出が爆増し、去年は過去最高の10億ユーロ（約1350億円）に達したとの報告書をまとめ、選挙前の大統領に痛手を与えた。そして仏金融検察局が、4月にコンサル会社への政府の多額の支払いに関する脱税疑惑についての捜査を開始していた。

エリート然として、すれ違ってもろくに挨拶もしない人が多いこの会社の社員達に良い印象を持っていなかった仏人同僚は何となく嬉しそうだ。こういうところにも半面エリートに憧れながらも、反発する仏人気質が現れているような気がする。

目の前で起こっている事が「半沢直樹」の世界のようだ。片岡愛之助（黒崎検査官）さんはいないが、そのうち段ボールを抱えた人たちが出て行くのかしら？と言うのも、これを書いている今現在上階で捜査が行われているからです。

まりさんのパリ通信（41）（2022.7）

帰国までの難関①

パリまり（パリ在住）

ベルサイユ宮殿の王女の寝室

コロナが始まって帰国が困難になって 2 年半。今年こそは一度帰りたいと、どんな手続きをすればいいのか調べてから航空券を予約。その後、問題が発生。

1 月に切れて更新手続きをした仏の滞在許可証が 5 か月経ってもまだ受け取れない。こちらから「まだ連絡が来ないんですけど」とメールを送る。するとしばらくしてから「もう出来ています。アポを取ってから来て下さい」と URL が送られて来る。これが何度やっても繋がらない。

みんな困り果てているようだ。誰かがどれくらいの確率でアポが取れるかを統計を取って上げていた。何と 8%の確率だそうだ。100 回試してみて繋がるのが 8 回あるかどうか。たとえ繋がったとしても、こちらで希望の日時を選べるとは限らない。自動的に送られて来る日時が無理だとすると、又 8/100 を試みることになる。

帰国予定までに受け取れなければ、出発は出来るものの、滞在許可証がないままで仏に再入国させてくれるのかどうか、大使館にも連絡して事情を説明するが「入国拒否のリスクはありますね」とのこと。頭を抱えた。

その後、何度も試みて奇跡的にアポが取れ、無事滞在許可証を受け取ることが出来たが、この手続きだけで心底疲れた。

まりさんのパリ通信（42）（2022.8）

帰国までの難関②

パリまり（パリ在住）

日本帰国にあたって、6 月から仏は安全な青のグループに組み入れられ、日本入国後の隔離がなくなった。それはありがたいのだが、出発迄に仏で行わなければならない手続きは何も変わっていない。出発 72 時間前から有効の陰性証明をもらうために、検査施設ラボに行ける日時を計算する。問題は厚生労働省が出しているフォーマットに医者のサインを貰わなければならないという

事だ。

PCR 検査の結果はすぐに出るわけではないので、結果が送られて来てから再度足を運ばなければいけない。二度手間だ。おまけに出発する水曜日の朝から逆算すると、日曜日の朝から火曜日の夕方までに 2 度行くという事になるが、月曜日が祭日なのに又頭を抱えた。日祭日は閉まっているラボが殆どだ。火曜日の朝に検査を受けても証明書が間に合わないリスクが高い＝飛行機に乗せてもらえないという事だ。

パリのアルベール・カーン博物館にある
日本庭園の茶室

「全くみんなどうしているんだろう」とぼやきながら、日祭日もやっている数少ないラボを探し出し、検査を受けに行った。夜に結果が来て無事「陰性」の QR コードが届いた。それを持って翌日再びラボへ。ここで記入ミスがあれば、乗機、又は入国拒否にあう憂き目となる。毎日何人かは泣く泣く出発国に戻されているという。私より数日前に出発する知人が「ラボで記入されてた日付が違っていたので、書き直してもらったのよ。要チェックよ！」と教えてくれていたので、しっかり見直すと日付はあっているのだが、送られてきた QR コードのものと、ラボで発行してくれた書類の時間が 4 分だけ違う。予約時間より少し早めに行ったのがパリのアルベール・カーン博物館にある日本庭園の茶室祟って、実際に検査した時間と予約時間に時差が生じたようだ。指摘すると一人は「ああ、そうね」と言って印刷してくれた女性に伝えてくれたのだが、他の人たちは「そうやって自動的に（予約時間で）出てくるのよ。私たちは毎日日本人ばっかりにこの証明書を出してるんだから、問題ないわよ！」と書き直してくれなかった。仏のいい加減さと日本の厳格さの間にはまってしまい、又悩む。

無事入国出来るまでサスペンスとストレスは続いた。

まりさんのパリ通信（43）　（2022.9）

お客様は泥棒？　　パリまり（パリ在住）

日本から帰仏して、1 週間内に 2 度メトロとスーパーで取っ組み合いの喧嘩を見た。両方とも女性同士だ。罵りの言葉が飛び交うのを聴きながら「ああ、パリに帰って来たな」と感じる。人々がギスギスしている。

ヘミングウェイが住んでいた建物

日本にいる間、緊張感を持たなくていいぬるま湯感覚にどっぷり浸かって、逆に「こんなに物事がスムーズに進んでいいの？！」と感じていた。仏ではスーパーに入る時、別の店で買った物を入店前に見せて申告する場合がある。万引き防止のためだ。客は盗む可能性があるという前提

だ。バッグの口を思いっきりテープでグルグル巻きにされ、会計の時に財布を出すのに一苦労した事もある。
日本では、そのまま持って入って何も買わずに出て来ても問題がない事にほっとする。やはり疑われるということは気持ちの良いものではないからだ。
楽な事にはすぐ慣れる。帰仏して買い物に行き、別のお店で買った物を持ったまま、他のスーパーに入った。ちらっと「セキュリティに見せるべきかな」とは思ったのだが、前には数人が並んでいて、時間がかかりそうだったのとほんの入り口の商品だけを見るつもりだったからだ。結局買わずに 15 秒ほど見ただけで、出て行こうとすると、案の定声がかかる。カバンの中身を見せ、前の店のレシートを見せても「どこで買ったんだ」と聞いてくる。「だからここに書いてあるでしょ」とレシートの店名を見せる。「何故、入る前に見せない」と横柄に言って来たので、こちらもカチンと来て「じゃあ、確認しなさいよ」とバッグの中にあった品物を並べてレシートに書かれてある物を一つ一つ見せる。セキュリティも分かってはいるのだが、入店前に自分に申告しなかった事が気に入らないらしい。「今度前もって見せなかったら止めるぞ」というのを無視して離れる。

「セキュリティの仕事は問題を起こす人を止める事なんだから、盗んだわけじゃない客にそういう態度はないんじゃないの」という客側と「盗んでいなくても申告せずに疑われるようなことをする客が悪い」と思うセキュリティ側では平行線で話が合わない。

お客様は決して神様ではないフランスを日々実感している。

まりさんのパリ通信（44）　（2022.10）
一期一会

パリまり（パリ在住）

ルーブル美術館・マルリーの中庭

もっぱらのお気に入りはルーブル美術館のテラスでコーヒーを飲む事だ。アレルギーが出るので、好きだったコーヒーをあまり飲めなくなり、週 2～3 回にしたので、どこでどのように美味しく飲むのかが重要になった。それで、週に一度はルーブルのセルフのカフェでガラスのピラミッドを眺めながらゆったりと過ごす。とはいえ、観光客の戻って来たパリでは相席になる事もある。

ある日、私がいたテーブルに上品な老夫婦がやって来て「ここ、よろしいでしょうか？」と訪ねて座った。マダムは車椅子だ。ムッシューが甲斐甲斐しく世話を焼き、飲み物を取りに行っている間、マダムと話をする。彼女はイタリア出身らしい。私がイタリアが大好きだと、訪れたところを一つ一つ挙げて行き、湖水地方のマッジョーレ湖の小さな島イゾラ・ベッラ（IsolaBella:麗しの島という意

味で島全体が宮殿と庭園）の白い孔雀達が印象的だったと話すと、「ああ、私はあそこの持ち主を知っているわ」と懐かしそうに言った。お年は召しているが、なんとなく品があるなと思っていたのだが、どうも貴族らしい。こちらでは時々そういう人達に出くわす。

楽しいおしゃべりの後、彼らは「お会いできて嬉しかったわ。良い週末を」と言って去って行った。

ルーブル美術館・ナポレオン３世の広間

まりさんのパリ通信（45）　（2022.11）

新生児命名ランキング

パリまり（パリ在住）

仏で最近発行された新生児命名のランキングを掲載する「L' Officieldesprenoms」（2023 年版）では、男児の首位がガブリエル（Gabriel）で、2位：レオ（Leo）、3位：ラファエル（Raphael）、4位：アルチュール（Arthur）、5位：ルイ（Louis）、6位：ジュール（Jules）7位：マエル（Mael）、8位：アダム（Adam）、9位：ギャバン（Gabin）、10 位：ノア（Noah）である。女児の場合はジャド（Jade）がトップで、以下、ルイーズ（Louise）、エマ（Emma）、アンブル（Ambre）、アリス（Alice）、アルバ（Alba）、ローズ（Rose）、アナ（Anna）、ロミー（Romy）、ミア（Mia）と続く。

仏の赤ちゃんに付ける名前は、既存のものが殆どである。キリスト教の国だけあって以前はカトリックの聖人の名前を選ぶ慣習があったが、昔、私がベビーシッターをしていた女の子の名前は「アレキサンドラ」だった。聖人以外の名を付けたかったお母さんは、役所に許可をもらいに行かなければならなかったと言っていた。

砂の彫刻

その時に流行っている名前をつけると、時が経った時、démodé（デモデ:流行遅れ）になってしまう事があるので注意が必要だろう。ケビン（Kevin）などがその例らしい。
今ではバリエーションも増えている。しかし、漢字の組み合わせや読み方で、無限に作ることが出来る日本のようなことはなく、キラキラネームばかりになるということはなさそうだ。

砂の彫刻

まりさんのパリ通信（46）　（2022.12）

「カフェのギャルソン」

パリまり（パリ在住）

ベルサイユの庭園を気持ちよく散歩し、大運河にあるカフェのテラスに座った。愛想のいいウェイター（garçon）が、注文したコーヒーをもって来た。テーブルで支払いをすると、返ってきたお釣りがかなり少ない。何度か来ている所なので、値段は知っている。値上げしてもここまではいきなり上がらないだろうという金額を取られている。普通、会計をしたらレシートを置いていくのだが、それもない。確信犯だなと分かったので、他のギャルソン何人かに値段を聞いてみたが、何とみんな知らないと言う。基本のカフェの値段を知らないはずはない。仏ではサービス係の担当テーブルが決まっているのだが、他のテーブルの事に口は出さないのか、はたまたみんな同じような事をやっているので、仲間を守るために（私のテーブルの担当者がいくら請求したのかがわからないのでうかつに値段を言えない）そう言っているのかもしれない。観光客の多い所では気をつけなければいけない。

仕方ないので、会計をした担当のギャルソンに、値段を聞き、『何度も来てるから知ってるし、カモになる観光客じゃないのよ』という意味合いの皮肉を込め、「Oh,ilatellementaugmenté.（あら、すごく値上がったのね？）と言うところを、俗語を使い「Ohlàlà！llavachementaugmenté,hein」（あらら、めっちゃ値上がってるやん！）と言ってみた。すると彼は慌てて「あ、間違えた、ごめんね」と言いながら 300 円程のお釣りを追加で返してきた。

「騙すなんて許せない！」と怒っても仕方がない、こちらでは「騙される方も悪い」と言う考えも受け入れないと生活して行けない。日本の常識はこちらの常識ではない。事実年に数人は仏の生活に疲れ果て、精神的におかしくなって日本に送り返されるらしい。ギャルソンに同情する気は全くないが『彼らも長い間観光客が少なくて儲けが少なかったんだろうな。でも騙されずに上手く切り抜けられてラッキー！』と思いながら帰途に着いた。

まりさんのパリ通信（47）　（2023.1）

仏の医療事情①

パリまり（パリ在住）

昔、母がパリに来た時、夜中に苦しみ出した。以前、大腸癌の手術をしたことのある彼女は、数年後から軽い腸閉塞の症状に襲われるようになった。暫くすると治る時もあるので、その時も様子をみていたのだが、どうも収まる気配がない。結局救急医に来てもらうことにした。

やって来た医者は彼女のお腹をちょっと触っただけで「はい、腸が動いていませんね。救急車を呼んで下さい。」と一言。駆けつけてくれた救急隊員は母を運びながら私に「小切手持った？」と聞いて来た。支払いが滞らないようにだろう。（注：仏では小切手での支払いは一般的）救急車内で過呼吸にならないように、紙袋を口に当て呼吸をしながら病院に運ばれ、受付を済ませると簡易ベッドのまま、他のベッドと看護師詰所の横に置かれた。申し訳ないのだが、隣は行き倒れで運ばれたのであろう浮浪者が寝ていて、なかなか強烈な臭いを放っている。苦しむ母に付き添い暫く待ったのだが、何も言ってこないので、「すみません、腸閉塞って放っておくと数時間で死に至るんですよね。」というとやっと病室に入れてくれた。

夜中でもあるので、常勤の医者はおらず、夜勤のインターン医が対応してくれた。四肢が攣って「痛い～。痛い～。」とうめく母の足を触り何とかしようとするのだが、痛みは治らない。そばにいた男性看護師が「こうするんだよ」と思いっきり足を押したら、そこらじゅうに母の悲鳴が響き渡った。彼女はその後「私をあんな目に合わせたあいつの事は一生忘れん」と言っていた。

点滴で症状は治ってホッとしていたら、翌朝やって来た常勤医が「あなたモルヒネを使ったの？！」とインターンを叱っていた。

まあ、その後母はけろりとしてたし、請求書は来なかったので良しとする事にしよう。

まりさんのパリ通信(48)　(2023.2)

仏の医療事情②

パリまり(パリ在住)

以前友人が乳癌で手術をした時の話である。
再建手術も同時にしたのだが、自分のお腹の肉を移植するという 10 時間近くかかった大手術だったにも関わらず、本人の希望もあるが、わずか 4 泊 5 日の入院で家に返されたそうだ。入院中からおもしろおかしく報告が来る。「カメルーン人の D 看護士が、血液が溜まるボトルを斜めにして計るから数値がメチャクチャ」「インドネシア人の M 看護士も集中して傾けてはった。今日やっと優秀な J 看護婦がテーブルに載せて目盛りを読むという快挙に」となかなか笑わせてくれる。

ルイ・ヴィトンに覆い被さる草間彌生

退院時はもう帰り支度を終え、手続きをしに行った彼女に受付スタッフが「あなた 1 ヶ月の自宅入院という形なんだから、毎日家に来てくれる看護士を手配しなきゃ帰れないわよ」と一言。傷口も塞がっておらず、血液ボトルをゴロゴロひいたままの彼女からの SOS に友人一同、一斉に電話で訪問看護士を探し出す。重病人の彼女も病院の待合室でひたすら電話をかけていると、見かねた他の患者が「あなた絶対おかしいわよ。あなたのようなケースは病院が手配するはずよ」と教えてくれ、再度窓口で交渉すると手配してくれた。何のことはない面倒くさかっただけのようだ。

病院専用タクシーに乗り込みやっと家に帰れると思っていたら、デモ行進にぶつかり進まない中、運転手に他の患者の依頼が入り「ごめん、もう 1 人乗せるわ」と出発から 1 時間後にまた病院へ。家にたどり着けたのは 2 時間近くたっていたらしい。

彼女の場合、手術から大分経ってもお腹の傷は塞がらず、胸も結局左右の大きさが違ったままで終わってしまった。彼女曰く「再手術は面倒臭いのでやらない」そうだ。保険が効いて手術も入院も無料という点は素晴らしいのだが、出来れば仏で入院、手術はしたくないなと思わされた。

まりさんのパリ通信(49)　(2023.3)

バックパック旅行記①

パリまり(パリ在住)

知人の子供が歴史の勉強で、地図を眺めながら「え、ドイツって西と東に分かれてたん？！」と言ったので、「そうか、今の子供たちは知らない子も多いんだ」とこちらの方が驚いた。「私が昔バックパックで旅をしていた頃、欧州は東西に分かれており、東側に行くにはビザが必要だった。西側をユーレイユパス(列車乗り放題のパス)で旅行していた時、ふと「アウシュビッツに行こう」と思い立った。オーストリアのウィーンのポーランド大使館と当時は一つの国だったチェコスロバキア大使館に寄り、ビザを取得、1日あたり25ドルの強制両替を終え、チケットを買ってポーランドに向かう列車に乗った。ここで2つの間違いをした事に気付いたのは列車が出発した後の事だった。

「街中の無料炭酸水機」

ポーランドに長居をする気はなかったので、ウィーンから直接クラコフへ行き、そこからアウシュビッツ行きのバスに乗ろうと考えていたのに、乗った列車がワルシャワ行きだった事と、オーストリアから陸路でポーランドに入るには、チェコスロバキアを通り、通過ビザを見せるのだが、往復ビザを取ったつもりが、片道ビザだった事だ。オーストリアとチェコスロバキアの国境で止まった列車に、軍人なのか警官なのか分からない武装した人達が乗り込んで来て、乗客はコンパートメント(列車の6人～8人のシートがある部屋)から追い出される。眺めていると、シートの上から下迄バンバン叩いて、何かを隠していないかを確認している。身分証明書をチェックしに来たコントローラーは、同僚の女性からりんごを齧らせてもらいながら、偉そうに私たちのパスポートを確認している。平和ボケしていた身には十分にショッキングな体験だった。そのコントローラーが、私がウィーンで取得したビザを持って行ってしまおうとするので焦った。「ちょっと待って、私、ウィーンに帰る時にそれが必要なの～！」とお願いするが、言葉が通じない。何やかんやで、やっと理解したのは「ポーランドのチェコスロバキア大使館でリターンビザを取り直せ」と言われている事だった。(続く)

犬の糞放置は罰金 135€

まりさんのパリ通信（50）　（2023.4）

バックパック旅行記 ②

パリまり（パリ在住）

ポーランドに向かう列車の中で、通過ビザを持って行かれてしまい、焦った頭で考える。「ウィーンのチェコスロバキア大使館で申請の時、往復ビザかと確認したつもりだったが、これは片道ビザだったのか？だとしたらポーランドのチェコスロバキア大使館で、再度ビザの申請に行かなければいけないが、大使館のあるのは首都のワルシャワだ。不幸中の幸いで、間違えて乗ったこの列車はワルシャワ行きだ。とりあえずチェコスロバキア大使館で帰りの通過ビザを申請し、夜の列車でクラコフに行けば良いのではないか」と腹を括ってワルシャワに到着。

「首都だから証明写真の機械位あるだろう。ビザ申請の写真を撮って、すぐに大使館に行こう。」と考えた自分が甘かった。そんなものはない！慌てて駆けずり回り、やっと写真店を探し、飛び込んで「Express でお願い！」と頼む。答えは「一日で出来るよ」だった。そんなに待ってはいられない。頭を抱えて、一か八か、持っていた「国際青年証」の写真を剥ぎ取って大使館に駆け込む。幸いな事に無事にビザを発行してもらえた。時間のロスを取り戻すべき、列車に飛び乗りクラコフへ向かう。

年金改革反対デモ

到着した時にはもう夜中になっていた。とりあえず駅の近くのホテルに行くが、ビザ発行手数料や列車代などで余計な出費があったため、二日分しか強制両替していなかったポーランドのお金、ズローティがもうほとんどなかった。受付で「明日両替して払うから」と頼み込み、その日は何とか屋根の下で眠ることが出来た。

翌朝早くアウシュビッツ行きのバスのチケットを買いに行った時に「両替しない？」と声をかけてきた人がいた。闇両替だ。銀行に行く手間が省けるし、銀行よりレートはいいはずだから」と軽く考えて必要最低分を両替してホテルに帰る。宿泊代を払おうとすると、受付の人は鋭い目つきで「あなた、昨夜お金がないって言ってたのに、何で払えるの？銀行はまだ開いてないわよ！」と突っ込んで来た。（続く）

ゴミ回収業者のストでゴミの山

まりさんのパリ通信(51)　(2023.5)
バックパック旅行記 ③
パリまり(パリ在住)

「この国怖い～！」と思った瞬間だった。こんなところで拘束なんかされたくない。パニックになりそうなところを何とか頭を働かせて「いや、本当はね、昨日お金はあったんだけど、バスのチケットを先に買いたかったので、そう言ったのよ。思ったよりバス代が安かったので払えるの。」と、前もって強制両替していた 50 ドル分の領収書を見せて納得したもらったが、冷や汗をかいた。

セーヌ川から見る夕陽

さて、何とか目的地のアウシュヴィッツ行きのバスに乗り込む。子供のようなアジア人が珍しかったのか、運転手さんが話しかけてきて(と言っても殆ど言葉は通じないのだが)、到着後も次の出発時間までガイドをしてくれた。何とか理解できた「ここではユダヤ人だけでなく、多くのポーランド人(=ユダヤ系以外のポーランド人)も殺されたんだよ」という言葉が心に残った。
話は変わるが、後年再度ここを訪れた時には日本人のガイドさんがいた。何と垂水の多聞台出身だという。子供の頃よく多聞台に遊びに行っていたので、超ローカルな話題で盛り上がった。

セーヌ川から見る夕陽

歴史の重みに押しつぶされそうになりながら、アウシュヴィッツ収容所と少し離れたビルケナウ収容所(アウシュヴィッツ第二強制収容所)を見学する。夕暮れ時になり人が少なくなってくる。ガス室の横に設置された焼却場から出た灰を捨てたという池のほとりに佇み、大きな夕陽を眺めていると、ヴィクトール・フランクルの「夜と霧」を思い出した。死と隣り合わせの絶望的な状況でも、強制労働で疲れ切った体を引きずり外に出て、沈む夕陽に「世界はどうしてこんなに美しいんだ」と感動したという人々の事を考えると、自然と涙が出て来た。

注:「夜と霧」オーストリアのユダヤ人精神科医、ヴィクトール・フランクルのナチスの強制収容所での壮絶な経験に基づいた記録。

まりさんのパリ通信（52）　（2023.6）

バックパック旅行記 ④ 「フランダースの悲劇」

パリまり（パリ在住）

子供の頃、日曜日の夜のアニメ「世界名作劇場」を見るのが好きだった。「アルプスの少女ハイジ」や「小公女セーラ」、「あらいぐまラスカル」、そして「フランダースの犬」。

昔、ベルギーのアントワープに行った時に、ネロとパトラッシュが前で息絶えていたというルーベンスの「キリストの昇架」と「キリストの降架」を大聖堂に見に行った。

ルイヴィトンの建物を
キャンバスにする巨大草間彌生

英国人作家ウイーダが書いた「フランダースの犬」は、日本では有名だが、舞台となったこの国では当時殆ど知られていなかった。ある時、アントワープの観光局で働く J さんが、日本人観光客に「フランダースの犬」の事をよく聞かれるのに気付き、逆に日本人にその話について聞かせてもらったらしい。早速図書館に行って探すと埃を被った 20 数年間に 1 度だけ貸し出された記録のある本が見つかったそうだ。その本を読んだ J さんは、本に書かれてある風景描写のリアルさに『作者はこの辺りに住んでいたに違いない』と確信し、ネロとパトラッシュの村を探し始め、やっとホーボーケンというアントワープ近郊の小さな村を見つけ出した。そこに（日本人が見るとパトラッシュが余りに小さな犬なのでびっくりする）ネロとパトラッシュの像が建てられた。それが日本で話題になり、いくつかのマスコミが J さんに取材に来ている頃に、私もアントワープを訪れた。日本の TV 番組で J さんが出ていたのをいくつか見ていたので、観光案内所にいた J さんに「日本の TV で見ましたよ」と声をかけた。J さんに何故フランダースの犬が当地では知られていなかったのかを聞くと、この話は悲しい結末である事、大人は子供に不幸な話をしたくなかったのだろうと推測し、そして又、「このあたりの村の人はネロとパトラッシュに親切ではなかったしね」と付け加えた。

面白い街中の建物
「住んでます？」

まだ初期の頃だったのだろう、J さんは日本の TV の話をとても喜んでくれ「是非、自分の家族にもその話をしてやって欲しい」と私を自宅に招待してくれた。さて、日本語以外まともに話せない私は頭を抱え、J さんの仕事が終わるまで、カフェで夏休み最終日のたまった宿題に追われる子供のように、何とか見た TV 番組を思い出し、拙い英語にまとめようとした。（続く）

まりさんのパリ通信（53）　（2023.7）

バックパック旅行記 ⑤ 「フランダースの悲劇」

パリまり（パリ在住）

パリの古いカフェの看板ネコと
アペリティフを楽しむ

ベルギー人一家のＪさんの家族は奥様と男の子２人、女の子１人の５人家族だった。暖かく迎えてくれた奥様は夕食を用意してくれていたのだが、これを見てびっくりした。日本人からするとパンとハムとチーズの朝ご飯だったからだ。暖かい料理がない。文化の違いを感じながらも美味しく頂き、しどろもどろでＪさんが日本でどう紹介されているかを説明した。楽しいひと時だった。その後１～２年は年に２～３度手紙のやり取りをしたり、マスコミに取り上げられているの見て「頑張っているんだな」と思ってはいたのだが、その後は音信不通で20年以上が過ぎた。

数年前、当時の写真を見つけ、ふと「Ｊさんはどうしているんだろう？」と思い、調べてみると衝撃的なニュースを発見した。

Ｊさんが殺人事件を起こし、刑に服しているという記事だった。オランダ語の記事を自動翻訳で訳し、分かった事は、日本人の妻を殺害したとのことだった。

想像するに「フランダースの犬」の村を発見した事で、日本人との関わりが増え、私が会ったベルギー人の妻とは別れ、日本人と再婚したのだろう。その日本人妻との関係もうまくいかなくなり、浮気をされたり、嫌がらせをされたりという事で、この事件につながったらしい。

裁判でＪさんは、それまで真面目な人生を歩んできた事、家族に対しても常に責任感を持っており、親切で仕事熱心なところが評価されていた事、充分に反省していることなどが考慮され、殺人としては例外的に短い懲役14年となった。

裁判の結果、陪審員は「彼は例外的に暴力的な行動をとった。彼は動物のように行動したと自ら述べている。そのためには厳罰が必要だ」と言うと同時に「悲しい事件が起こったが、彼の誠実な人柄と功績が損なわれるわけではない」とし、裁判長は「この判決は、まだ将来への展望を与えてくれるが、事実の重大性にも合致している」と語り、また、「社会に戻ることが許されるなら、多くの人があなたを支持すると思う」と述べた。

ウォーホル＆バスキア共作展

今、手元にある最初の家族との古い写真、ベルギー人の奥様と子供達、バックパック旅行で長い間切っていないもさもさのヘアスタイルの私が、子供の一人を膝に置いている笑っている写真を見ながら、「フランダースの犬」がきっかけで人生を狂わしてしまった気の毒な人の事を考えている。

まりさんのパリ通信（54）　（2023.8）

事務所での出来事 ⑤

パリまり（パリ在住）

仏で 17 歳のマグレブ系（モロッコ、チュニジア、アルジェリアなどの北アフリカのアラブ諸国）仏人の男性が警官に射殺され、仏全土で暴動が起こっていたのは、世界的なニュースになっていたので、ご存知の方も多いだろうと思う。

アントワープの大聖堂の前にあるネロとパトラッシュの像

しばらく暴動が続いていたある日、職場で仏人同僚に「この辺りに被害は出たの？」と聞くと「ここは警備が厳しいから今のところ大丈夫じゃないか」という返事が戻って来た。

その日仕事を終えて外に出ると、同じビルに入っているカフェのテラスの窓が壊されて放火され、屋根の一部が焼け落ちていた。どうも前夜の出来事らしい。足元がやられてるのに「気づけよっ!!」と自分にツッコミを入れ、同僚に「さっきこの辺り被害がないって話してたけど、ベランダから下覗いてみて」と電話をする。同僚も「ウララ～」と驚いていた。この日、事務所に出入りした人が 5 人いたが、誰一人として気が付いていなかった。言い訳のようになるが、現在事務所のあるビルが、工事中で建物前に壁が作られ、幅広い建物のそれぞれの入り口がへっ込んでいて、自分の入り口を探すために、どうしてもそちらの方に視線が行ってしまう。おまけにカフェのテラスは 20m ある歩道の反対側にあり、建物とテラスの間は人が通る。焦げ臭い臭いもしなかったし、全く気が付かなかった。

事務所下の放火されたカフェ

このブティックカフェは数年前にオープンしてから、もう 3～4 度は被害に遭っている。こうなると「大変だっ!」というより「あらら、又やられたのね。かわいそうに、ここのケーキ

事務所下の放火されたカフェ

の値段が高い訳がわかったわ。」くらいの感覚になってしまう。
慣れって恐ろしい。

7 月 14 日の日本でいう「パリ祭」前夜が危ないかと思っていたら、翌々日の新聞に「車両 218 台に放火、97 人を逮捕。比較的平穏だった 7/13 の夜の結果」との見出しが載っていた。「比較的平穏」って…と苦笑するところなのだが、以前「平時でも放火される車両の数は日に約 100 台」と聞いたことがあるので、「確かにこれくらいで済んだのね」とも思った。
慣れって本当に恐ろしい。

まりさんのパリ通信(55)　(2023.9)
バックパック旅行記⑥「T シャツ」
パリまり(パリ在住)

ルーブル美術館にある
約 3000～3500 年前
の古代エジプトの家具

昔、欧州周遊をしていた頃、生活費は 1 日 5000 円と決めていた。それでも予算オーバーになると宿代を浮かすために周遊パスを利用して、よく夜行列車で移動していた。五夜連続で移動した事もある。夏だったので、シャワーは海辺のビーチの無料シャワーで済ませる。仏のニースでシャワーを浴びてサッパリしたところで、次の街に移動する為駅に戻る。ここで荷物を預けた時に貰ったはずのチケットがないのに気がついた。さあ、困った。荷物を引き出せない。仕方なく預かり所でジェスチャーを加えてチケットを無くした事を訴える。係員は私が指差すリュックを持って来て中を見て、本当に私のものかどうかを確かめるため「何が入っているの？」と聞いて来た。私はピンクのブタの描かれた T シャツを持っていたので、「Pink pig T-shirt ！」と叫ぶと笑いながら一発で返してくれた。「わいはブタやねん、それがどうした！」と書かれた文字の説明までは求められずに済んだ。

物価が高い北欧では宿代だけで予算オーバーなので長居出来ず、フィンランドはスウェーデンからフェリーで日帰りで行く事にした。ヘルシンキの公園にいると一人の男性に日本語で声をかけられた。話してみると東大に留学していたことがあるというフィンランド人だった。彼は「僕は駒場留学生会館という、とても古くて汚い寮に住んでいました。ゴキブリがいっぱい出たので、僕達留学生は『Komaba Ryougakusei Kaikan』と書いたゴキブリの絵の T シャツを作り着ていました。」と教えてくれた。北欧のような寒い国には日本サイズのゴキブリは存在しないだろうから、さぞや怖かっただろうと想像するが、それでもめげない彼らのユーモアに脱帽した。それにしても天下の東大も、もう少し何とかしてあげる事は出来なかったのかしら？

ブリュッセルの教会の横に設置された、本を寄付する箱、欲しい人が貰って行く

まりさんのパリ通信（56）　（2023.10）

バックパック旅行記⑦ 「モロッコでの思い出」

パリまり（パリ在住）

バックパックで欧州を巡っていた頃、地図を見るとアフリカ大陸が意外と近い事に気がついた。スペインからモロッコのジブラルタル海峡の一番短いところで 15km 程らしい。対岸の灯りが見える距離だ。後年、北アフリカ側から欧州側を見て、夜煌々と輝く灯りに文明を感じて、不法難民が渡って来ると聞いた事がある。そんなに近いのなら行くしかないと何の知識もないまま船に乗り込んだ。

彫刻の手の上にとまるカラス

船の甲板で海を眺めていると、アラブ系の男性が「一緒に写真を撮ってくれない？」と声をかけて来た。以前エジプトに行った時にもあったのだが、町で知り合った日本人大学生と話している時、ラコステのポロシャツ（コピー）を売りつけに来たエジプト人のおじさんが、やはり私達と一緒に写真を撮りたがった。撮影した後、去って行くおじさんを見ながら大学生が「あの人、ああやって自分達と撮った写真を他の日本人に見せて『俺には日本人の友人がいるんだ』と言って安心させるんだろうな」と呟いた。今迄何度かそういう人に会っていたので、「ああそうだったのか」と合点がいった。なので今回も、適当にあしらいながら船内に降りた。そこで又モロッコ人の若い男の子が声をかけて来て「今、君に話しかけて来てたのはスリだから気をつけた方がいいよ」と注意して

くれた。そうだったのか、しかし私には見分けがつかないので仕方がない。彼は「よかったら僕達のところに来なよ」と誘ってくれるが、内心『あなた達も信用できるとは限らないわよね』と思いつつ、同い年位の女性も 2 人いたグループだったので、合流させてもらった。おしゃべりしている間に彼らも船で知り合ったばかりのモロッコに里帰りする人達だということが分かった。出身地もラバトサレ（首都ラバトの郊外の街）、カサブランカ、マラケシュとバラバラだ。

17 世紀の宮廷音楽で踊るダンサー

モロッコ側の街、タンジェに着いた後も、みんなで南下する列車に一緒に乗ることにした。（続く）

まりさんのパリ通信（57）　（2023.11）

迷惑な爆破予告

パリまり（パリ在住）

ハマスとイスラエルの紛争が始まってから、仏でも空港や美術館、博物館などに爆破予告が相次ぎ、その都度訪問者が避難させられている。
先日ベルサイユに行って、離宮の方から宮殿側の庭園に戻ろうとしたら、係員に「爆弾騒ぎがあったので、今は閉まってるよ。あと 1 時間もしたら再開すると思うけど」と言われた。「え～、又？！これで 7 回目だよね。」と言うと、彼らも慣れたもので「そう、7 回目」と返して来る。仕方ないので、退去範囲に入っていない大運河側の Cafe で一休みする事にする。ギャルソンにも「いつ再開するかしらね？」聞くと「いつもは爆破予告があってから、みんなを避難させてチェックして、大体 2～3 時間後だね。日曜日は必ず再開するから大丈夫だよ。」としっかり日常になっているようだった。親切なギャルソンは、暫くしたら「マダム、再開したみたいだよ。」と教えてくれた。騒ぎがあった後も結構な人が行列を作って並んでいた。みんな途中で追い出されたので再入場しようとしているのだろう。ほとんどの人がいたずら電話だと分かっていて怖がらないようだ。

オペラの衣装

オペラの衣装

今のところ 2 人の犯人が捕まっており、先日 36 歳の男性が執行猶予付き 8 ヶ月判決を受けた。「爆破予告のニュースを見て自分もやれると思った」と、なんとも迷惑な動機がだった。電話一本で大騒動を起こせるのだから簡単なもんだと思ったのだろう。こんな人達が増えませんように。

まりさんのパリ通信（58）　（2023.12）

バックパック旅行記⑧ 「モロッコでの思い出」

パリまり（パリ在住）

みんな日本人の女の子が一人で旅をしているのが興味深いらしく、色々質問して来て「うちの街に来たら寄ってよ」と住所をくれる。予定を決めていなかった私に、ファティマという女の子が「よかったらうちに泊まって行けば？」と誘ってくれた。渡りに船と彼女に着いて行くと、10人程の子沢山の一家だった。もう成人した子ども達の何人かは独立していたようだが、お父さんとお母さんと6～7人の子ども達がいた。とても覚えきれないので、みんなの名前を紙に書いてもらう。一番下の愛らしいアジッドはまだ3歳だ。東洋人が珍しいのかちょこまかと私について回って離れない。WC にまでついて来て、こちらがしゃがむと彼も向かい合って座る。『一応君も男の子だよね、まあ、いいけど』と苦笑。

仏式庭園

ファティマとその姉妹は私を色々なところに連れて行ってくれた。モロッコでは乗合タクシーが普通だという事、マルシェでは味見のためにフルーツなどを勝手に取って食べても叱られない事、家でこねたパン種を街のパン屋に持って行って、かまどで焼いてもらう事、お呼ばれした隣人宅ではミントティーを10杯余りも飲んでしまったのだが、こちらでは客のコップを空のままにはしないで、すぐに注ぐことが礼儀である事などを色々学んだ。

モロッコでのお洒落なのだろう、こちらから見たら少々古めかしいドレスを出して来てくれ、みんなで写真撮影したのもいい思い出だ。夕食は床に座ったまま、山盛りの大皿のクスクスをみんなそれぞれ手で摘んで食べた。

一晩お世話になったファティマの家から「カサブランカ迄行って、又戻って来るよ」と、列車に乗って出発。前日食べたクスクスのせいか、マルシェであれやこれやとつまみ食いしたせいなのかは分からないが、列車の中で吐き気を催し、カサブランカに着いてカフェに飛び込む。旅に食中毒は付きものだ。（続く）

まりさんのパリ通信（59）　（2024.1）

バックパック旅行記⑨ 「モロッコでの思い出」

パリまり（パリ在住）

軽い食中毒を起こし、カサブランカのカフェでしばらく休んでから、船の中で声をかけてくれたアジズの家を探す。「お母さんと妹がいるから遊びにおいでよ」と言ってくれていたのだが、私が訪ねた時に、確かにお母さんと妹さんが出て来てくれた。しかし、肝心のアジズはまだ旅行から帰って来ていないというではないか。それなのに 2 人は初めて来た東洋人を快く家に迎え入れ、「アジズは明日帰って来るから、今夜はうちに泊まりなさい」と言ってくれる。なんて優しい人達なんだろう。今アラブ系、イスラム教徒というと、植え付けられた過激派のイメージを持つ人が多いが、私はこれらの体験から一部の行動だけで多勢をもそうだと決めつけてしまう風潮には危惧を抱いている。

仏式庭園の植木

美人の妹と同じベッドに寝させてもらい、早朝のコーランの音で目覚める。又々ドレスが出て来て、着せ替えごっこをしているうちにアジズが帰って来た。バイクでカサブランカの街を案内
してもらう。彼はカサブランカの 2 年連続ボディビルのチャンピオンだったそうだ。医者であるお姉さんのキャビネに寄って、少しおしゃべりしてから、ラバトに戻る列車に乗る。スペインに帰
る前に再度ファティマの家に挨拶に寄ると、お父さんもお母さんもスペインにいる兄弟の家に行く所だから一緒に行けと言う。これには正直困った。子供達とはなんとか片言の英語とジェスチャーで会話が成り立ったが、ご両親は全く英語を解さない。私のアラビア語は「シュクラン（ありがとう）」止まりだ。これで長時間の同行は少々辛い。それでも互いにニコニコ、懸命に意思疎通をはかりながらなんとかスペインに到着。最後、お別れの時にお母さんが自分の胸に手を当てて、次に私を指差し、再度自分の胸を叩き「ママ」と言った。お父さんにも同じ事をする。『私たちはあなたのモロッコのパパとママだよ』という事を伝えたいのだと分かった。嬉しさで涙ぐんでハグのお別れをした。
旅の醍醐味は人との出会いだ。一期一会であったとしても、一生の思い出になる。

まりさんのパリ通信（60）　（2024. 2）

バックパック旅行記⑩ 「ワンネス」

パリまり（パリ在住）

ナポレオンの戴冠式

欧州放浪の旅をしていた頃、毎日違う場所、違う体験にだんだんと心がオープンになって来ていたように感じる。雨が降ると公園の木の下で雨宿りをし、止むと遅れて枝葉からポツポツと落ちて来る雨粒を夢中になって手のひらに受け取めたり、子供のように色々な事が楽しめるようになっていた。
列車移動が多かったのだが、欧州の列車にはコンパートメントという部屋になった席があった。6～8 人掛けのシートがあり、扉を閉めると個室になる。カーテンを閉めてしまえば廊下から見えなくなる。

空いていた列車で運良くコンパートメントを独り占めできた私は、リュックを枕にしてゴロリと寝転んだ。しばらく眠って、ふと目を開けると車窓の外の風景、流れゆく木々と青い空が目の中に飛び込んで来た。半覚醒のような状態で、その風景をぼんやりと眺めていると、魂が体の中から抜け出したような、自分と全てのものが調和している様な感覚になった。その時はわからなかったが、後から考えるとワンネスというものを経験したのかもしれない。身体の中に押し込められている自分ではなく、全てと一体化している状態とでも言うのだろうか。どれくらいの間その感覚の中にいたのかはわからない。時間すらもなくなっていたような気がする。その後、自分の身体の中に戻って来たという表現が正しいのかどうかはわからないが、目覚めた瞬間ボロボロ涙が出て来て止まらなかった。これも後付けになるが、本当の自分とは何かというのを思い出せた喜びの涙だったのではないだろうか。

マントと十字架

長い間旅をしていると、心が解放されて来る。そういう状態の中で訪れた至福の感覚、この感覚をもう一度味わいたいと、ずっと願っているのだが、悲しきかな、現実にどっぷり浸かって生活していると、あれ以来一度も経験する事ができていない。

まりさんのパリ通信（61）　（2024. 3）

バックパック旅行記⑪ ベルガモ

パリまり（パリ在住）

ベルガモ

40年前バックパッカーをしていた頃を思い出し、年末年始バックパック旅行をやってみた。アラ還女子バックパッカーである。昔は3ヶ月から半年も旅していたが、さすがにそれは大変そうなので、感覚を取り戻そうと5日間、毎日場所を変えてイタリア5都市を回ってみた。昔は見るもの聞くもの新鮮だったが、今は自分自身が新鮮ではないなと思いつつ、それでもちょっとしたハプニングも楽しんで過ごした。イタリアは古代、中世、ルネッサンスとどの時代も興味深いもので溢れている。
古代ローマとルネッサンスおたくとしては、「どうしてイタリアに住まなかったのかな」と思う事もしばしば。しばらく行かないと禁断症状が出て来る国イタリア。何度も行っているのだが、今回の旅でも魅力を再発見した。

まずは中世の街、ベルガモの旧市街チッタ・アルタへ向かう。
時が止まったようなこのチッタ・アルタの中心となるヴェッキア広場へ。12世紀建設のラジョーネ宮、かつてヴェネツィア領であったことを示す「サン・マルコの獅子」の彫刻の下のバルコニーに草間彌生の展示会の広告が出ていた。

草間彌生展の広告

次の街ベルージャに行くためのバスのチケットはすでに買っていたのだが、早めに行ってバス停を確認する。特に No があるわけではなく、前で待てと指さされた長い壁は落書きだらけで、100人はいるであろう難民らしき人達が寝転がっていたり、集まって話込んでいる。ここで寝泊まりしているようだ。女性の姿は見当たらず、ここで待てといわれても、正直とても待っていられない。イタリアは難民で大変な事になっていると聞いてはいたのだが、パリにも沢山いるので同じようなものだと思っていたが、これだけの人数が集まっているのにはびっくりした。仕方がないので、出発時間の少し前まで、駅を離れ歩き回る。イルミネーションとクリスマスマーケットで賑わう一画で、ショッピングや食事を楽しむ人達と、駅前にたむろする難民達のギャップに現実を感じながら、バスが来ているのを確認してそそくさと乗り込む。さすがイタリア、客は3人だけにも関わらず予約客はもう乗ったとば

かりに予定10分前に出発する。そう、時間にいい加減なのは遅れるだけではないのだ。

まりさんのパリ通信（62）　（2024. 4）

バックパック旅行記⑫

パリまり（パリ在住）

ベルガモからバスで 45 分程でブレーシャに到着、暗くなっての到着なので駅の近くに宿を取っていたのだが、やはり駅周辺は治安が良くなさそうだ。すれ違いざまに奇声を上げてこちらを驚かそうとする輩がいる。夜の外出は控えて就寝。

イタリアの朝食

翌朝、ホテルでの朝食、イタリアの朝食は甘い物が多い、フランスのクロワッサンは中に何も入っていないのだが、イタリアのそれは、クリームやジャムやチョコレートが入っている。シンプルなものが食べたいなと思ってもなかなか見つからない。ハムの種類は豊富で、普段は高いのであまり食べない生ハムもしっかり頂く。残念な事に天気は雨。歩いて 20 分ほどのサンタ・ジュリア博物館へ。世界遺産にも登録されているこの広大な博物館は古代からロンゴバルド美術、ルネッサンス期となかなかの見応えがある。近くの古代ローマ遺跡にも足を伸ばし、しばしタイムトリップ。塩野七生ファンとしては嬉しい限りだ。

次に列車で「ロミオとジュリエット」の舞台であるヴェローナへ向かう。列車の中で物乞い兼スリが回って来る。結構しつこいので持っていたお菓子を渡すが、それでも立ち去らない。よく見ると隣の席に置いていたリュックに掛けていたジャケットを触っている。全く油断も隙もない。荷物を抱きかかえて睨んでも『バレたか』とばかりに悪びれることなく次の乗客のもとに行く。フランスのより馴れ馴れしいのはお国柄かしら。

2000年前の壁を
利用して建てた家

ヴェローナに着いて観光。広場にある円形競技場をぐるっと回りながら、妹と姪に Line でバーチャルツアーをする。「1世紀に作られた円形競技場だよ。この向かいにその一部を使って家を建てているの。2000 年前の壁を利用して家を建てるってどうよ？！」と姪っ子に言うと「凄いな」
と興味を持ったようなので「イタリアに来る？」と聞くと「まあ、気が向いたら」と反抗期らしい答えが返って来た。

姪には歴史好きになって欲しいなとは思うが、「ジュリエットの家もお墓もあるよ。シェークスピアの創作なのにね」と夢を壊してしまう叔母である、「歴史って時の権力者が自分に都合のいいように改ざんに次ぐ改ざんを重ねて来たから、殆どが嘘やで」と茶々を入れそうな気がする。

まりさんのパリ通信（63）　（2024. 5）

バックパック旅行記⑬

パリまり（パリ在住）

ホテル代がかなり高騰しているので、安宿を探すのだが、かなり不便な場所になってしまう。一人旅をする割には自他共に認める方向音痴である。以前友人と一緒にヴェネツィアに行った時の事、自身10回は来ているのに初めて来た友人に地図を渡して「はい、よろしく」という私だ。その友人が実家に遊びに来た時、母に「お母さん、マリさんは道2回曲がったら終わりですよ！」と報告していた。

バールのピザ

地図は回さなければ理解出来ない。確認して「こっちだ」と向かった方向が反対なのは当たり前。今はスマホがちゃんと誘導してくれるのに、違った道を行き訂正される。宿から一歩出たらもう迷子という感覚で歩いている。同行者がいたら丸投げで自分で地図をチェックしようともしない。しかも間違っている可能性大なので、かえって迷惑をかける。みんなに呆れられているのだが「行って無事帰って来れてるって事は何とかなってる事よ」と開き直っている。

ローマ時代の遺跡

ヴェローナでもスマホ頼りに暗くなって来た道を延々と歩くが、何やら人気のない所に出てしまい、何度も住所を確認する。やっと到着したと思ったら、カトリック系の宿泊施設らしくホテルのような入口がなく、住所の道を行ったり来たりを繰り返し、何とか受付時間終了の20h前に滑り込めた。

その日は大晦日、5分程歩いた所にレストランが1軒あったのだが、面倒臭いので部屋で夕食を取ることにする。こういう時のためにカップラーメンとアルファ米のビビンバとミニ湯沸かし器を持って行っていた。丁度年越しそばになっていいと、ラーメンのお湯を沸かそうとするが、何とコンセントが合わない。前日のホテルでは使えたのに何故？お湯が沸かせないとラーメンが食べられないではないか。お湯を貰おうにも受付にもう人はいない。

『電車の中で物乞いにお菓子をあげなければよかったな』などと思いつつ、アルファ米はお湯で10分、水で40分で出来ることに気が付いた。水を注いで待っている間に、家で大晦日のパーティーをしている友人からご馳走の写真が届く。美味しそうな料理が並んでいるが、一週間前に彼女の家でクリスマスディナーを頂いた身としては、毎週ご馳走を作らなければいけない友人に同情する。案の定力を使い果たした彼女から「もうしばらくは何も作りたくない」とのメッセージが届く。『その点独り身は気楽よ～』と冷たいビビンバで年越しをした。

まりさんのパリ通信（64）　（2024. 6）

バックパック旅行記⑭

パリまり（パリ在住）

テ離宮の巨人の間

4つ目はマントヴァ、こじんまりとしていながら見どころがいっぱいの街だ。ルネサンス期を代表する女性、マントヴァ侯妃イザベッラ・デステが繁栄させた街である。あちこちの宮殿や教会に残る騙し絵が見たくての再訪だ。テ離宮の「巨人の間」では神々の怒りに触れた巨人達の上に崩れた瓦礫が天井、壁の境なく描かれている。折しも日本での地震のニュースを聞いたばかりだったので、複雑な気分で見学した。

この街でロンバルディア州の美術館、博物館150件以上が1年間入り放題のパスを作る。45ユーロ（約7300円）とイタリアの太っ腹さに感激しながら、ドゥカーレ宮殿、テ離宮などの美術館や、博物館を周り、マントヴァだけで元が取れた。

ドゥカーレ宮殿の台所の階段

ここで泊まったのは、初老の女性が自分のアパートの一部屋を貸している民泊（Airbnb）だった。人懐っこい猫と一緒に迎えてくれた彼女の部屋のあちこちに平和へのメッセージが貼ってあり、人柄が伺い見えた。朝食も有機のコーヒーやパンで揃えてくれていた。イタリアは廃棄油の処理が大変だと聞いていたので、使用後の油を固めて捨てられる100均の商品をお土産に持って行ったのだが、プラスティックのゴミが出るなどの理由で受け取ってもらえなかった。こういう自分の意思をしっかりと持っている人は嫌いではない。泥棒の多いイタリアにも関わらず、荷物を預かってくれ、「いないかもしれないので、自由に入って、後は郵便箱に入れておいてね」と鍵を渡してくれた。再度この街を訪れる時には、又ここにお世話になろうと思った。

まりさんのパリ通信(65)　(2024.7)

バックパック旅行記⑮

パリまり(パリ在住)

さあ、最後の年ミラノへ出発。大都会ミラノでは、ドウモに登ってミラノの街を見回し、レオナルド・ダヴィンチ博物館へ。潜水艦や飛行機、戦車、ロボットetc….500 年前にこれだけのアイデアを考え出した彼はやはり天才だ。

レオナルド・ダ・ヴィンチ博物館

次に世界で一番好きなデッサン「アテナイの学堂」のあるアンブロジアーナ絵画館へ。これはラファエッロのバチカンのシスティーナ礼拝堂の次の間にあるラファエッロの「アテナイの学堂」の下絵なのだが、個人的には完成した絵より、こちらのデッサンの方が好きだ。できれば自分の部屋の壁紙にしたい程だが、ポスターで我慢している。この部屋でデッサンに見惚れてぼーっとしていたら、1 時間 40 分が経っていた。そういえば昔、母と来た時にも「私多分ここに 1 時間はいると思うんで、先に他のもの見てきて」と放っぽり出したっけ。

ローマに友人と行った時もフォロ・ロマーノを充分に見て回った後、「そろそろ行こうか」という友人に「私、もう少しいるわ。さっき靴見たいって言ってたよね。2 時間後にテルミニ駅のマクドで落ち合おうよ？」と言ったこともあったっけ。1 人で行動出来る友人だったので「OK、じゃあ後でね～」と快く承諾してくれたのだが、自分の好きなものには好きなだけ没頭していたいタイプなので、知人に付き合わすのも申し訳ない。必然、一人旅が多くなる。

ラファエッロの『アテネの学堂』のデッサン

ラファエッロのデッサンと至福の時を過ごした後、空港に向かう。
夜の LCC(ローコストキャリア)のお約束、出発が遅れる飛行機の情報をチェックしながらラウンジで夕食。昔の旅の仕方も思い出し、楽しい旅だった。年間ミュージアムパスも作ったし、今年はイタリア年という事にしてまた来よう。

まりさんのパリ通信（66）　（2024. 8）

盗難事件の顛末

パリまり（パリ在住）

メソポタミアの遺跡に囲まれてヨガ

昨年パリ郊外で知人が盗難にあった。監視カメラに写っていた泥棒は常習犯で、警察のリストにも記録されている人物だった。台所付きのアパートホテルだったのだが、いかにもここに住んでいるという感じで、ペットボトルの水とバゲットを持ってふらっと入って来ているのが録画されていたそうだ。盗んだ荷物の代わりにそれらが部屋に放置されていた。

彼女が警察に盗難届を出しに行くのに付き合った。書類を作ってくれる婦人警官に「来年のオリンピック時には沢山の人が来るんだよね。何人が被害にあうことやら」と言うと真剣な顔付きで「（パリに来る人達に気をつけるよう）脅しておいてよ！」と返された。彼女も被害者が増え、自分の仕事が増える事を危惧しているようだった。

大道芸人

その時の犯人が捕まり、7ヶ月以上経っていきなり「今日午後裁判があるが傍聴するか？」との連絡が入った。知人は日本に住んでいるので、仏の連絡先として私の電話番号を残していたためだ。なんでも損害賠償請求をするなら初回は国選弁護士が無料で代理を務めてくれるが、盗まれたものの領収書がないと賠償請求は難しいという。そんな事を当日の朝に言われても本人は日本だし、用意出来るわけがない。おまけに領収書が揃うまで裁判を延期できるが、2度目からは弁護士代が税抜1500ユーロかかるという。結構な被害額ではあったのだが、保険である程度返って来ていたのと、常習犯である犯人に賠償能力はなさそうという事で、裁判延期は頼まないことにした。

結果、賠償金なし、詳しいことは教えてくれなかったが、犯人は釈放される可能性があるとかないとか……盗難事件などは多すぎていちいち勾留しておく余裕がないということか……

ああ、フランス！

まりさんのパリ通信（67）　（2024. 9）

日帰りミラノ旅行

パリまり（パリ在住）

ミラノのスカラ座の
マリア・カラスの衣装

イタリア熱が再発したので、今度はパリからミラノへ日帰り旅行は出来るかとチャレンジしてみた。パリは欧州の比較的中心にあるので、どこにも行きやすい。目標は如何に安く充分に時間を取って楽しめるかだ。

パリーミラノ間往復を格安航空券で 46€（約 7800 円）で購入し、朝 4 時起きで近くのナイトバスの乗り場へ。タクシーを使えば楽なのはわかっているが、飛行機代より高いタクシー代を出すのは馬鹿らしい。Navigo（定期券）で乗れる公共交通機関で交通費を抑える。問題は朝 4 時台に外をウロウロしている人達だ。早朝勤務に向かう人もいるが、問題のある人達も多い。案の定バス停近くで、じっとこちらを見つめていた男性が「マダム、僕は住む家がないんだ。お金を恵んでくれ」と言って来る。バスに乗ってしまえば 20 分弱で空港に着く。7 時前の飛行機に乗り、8 時半ごろにはミラノの空港に降り立った。市内に出て、バール（カフェ）でパンを買い朝食とする。いくつもの美術館や博物館が入ったスフォルツァ城へ。こちらでたっぷり絵画、楽器、家具、考古学博物館を見てまわり、最後はミケランジェロ作、未完のピエタ像で締め括る。

ミケランジェロ、
未完のピエタ

本場のピザを食べるのも目的の一つ。ブレラ絵画館の近くのカフェで大きな薄いマルガリータと炭酸水とコーヒーで 13€。パリに比べると嬉しい値段だ。美味しいピザに満足して美術館巡りを再開。ブレラの後は 1 ヶ月前にも訪れて気に入った元貴族の邸宅のお気に入りの部屋と絵だけをさらっとみて、スカラ座へ。いつかここでバレエも観てみたいなと思いつつ、昔貴族が借り切っていたという Box 席から劇場内を見渡す。マリア・カラスがよく出ていた劇場なので彼女の写真やビデオや衣装が沢山展示されている。ミラノはミュージアムシティと宣伝しているだけあり、ふらっと歩いているだけで美術館に行き当たる。通りがかりに目についた個人邸宅のコレクションも見学して、大聖堂へ。前の広場では大道芸人が美声を響かせていた。街をひと歩きして空港へ向かい、夕食は空港ラウンジで済ませる。

沢山訪れた美術館もお正月に get したミュージアムパスで全部無料。

夕食も空港ラウンジにクレジットカード付随のパスで入れるので料金はかからない。交通費と食費のみで合計 77€（約 13000 円）程だった。

結論、パリからミラノは日帰りでも充分楽しめます。癖になりそうだ。

まりさんのパリ通信（68）　（2024. 10）

オリンピック期間

パリまり（パリ在住）

オリンピックが終わった。
開会式から議論を呼び、日本選手も活躍、パラリンピックも今までになく注目を浴びた大会だった。

馬でパトロール中の警官

事前情報で、ものすごい数の人がやって来て、狭いパリはめちゃくちゃになると報道されていたが、蓋を開けてみると料金が 2 倍に値上げされたメトロはガラガラ、毎夏観光客で賑わうので、今年はむしろ少なく感じた。恐れをなしたパリジャンがバカンスでパリから脱出したのと、例年の観光客がオリンピック期間を避けたせいだろう。逃げ出せなかった居残り組は、様々な規制に苦しむことになる。交通規制で一般車の数がグッと減り、あちこちで道が閉鎖され、開会式前 1 週間はセーヌ川周辺が立ち入り禁止となり、対岸に渡るのに大回りをしなければならなくなった。

ブルボン宮（ 国民議会議事堂）の
スポーツをする『ミロのビーナス』

オリンピック施設の周辺に住んでいる人や勤めている人は、帰宅や出勤するためにも許可書を申請しなければならなかった。これがまた複雑でゾーンの色で、車、バイク、自転車、徒歩によって変わってくる。許可書申請をしなければいけないのか、しなくてもいいのかが分からず、パリ市に問い合わせるが、人によって言うことが違う。役所の方も混乱しているようだ。「あなたのところはグレーゾーンだから申請をしなきゃダメよ」と言われ、再度ゾーンマップを見るが、申請が必要なゾーンからは少しはずれているような気がする。そこで「昨日電話で問い合わせたところ申請をしろと言われましたが、本当でしょうか」とメールを送る。数日後に戻って来た返事には「必要ありません」だった。

オリンピックが終わって、やっと通常に戻るとホッとしていたら、メトロも道路も混み出し、閉鎖されていたメトロの駅も再開され、職場まで 3 駅飛ばしの快速だったのが各駅停車に戻って時間がかかるようになった。どっちもどっちだなぁ。

レディファースト　（2024.11）

パリまり（パリ在住）

ある日、ルーブル美術館の無料のガイドツアーに参加した。運良くその時間に参加したのは私一人だったので、ガイドさんに矢継ぎ早に質問をした。訪れたのはナポレオン 3 世のサロン部分、赤と金で装飾された豪奢な空間なのだが、よく見ると大理石だと思った壁は絵でそう見せかけているだけ、ドアや壁の装飾部分は木彫りかと思いきや、石膏のようなものを貼り付けて金色に塗っているだけだった。

ここは 1989 年まで財務省が使用しており、財務大臣と家族と家族の住居もあったという。「では、歴代の財務大臣はここで暮らしていたの？！」と驚くと、ガイドさんは「そうよ、ここにプライベートアパルトマンがあったの。」と教えてくれた。財務省が近代的なベルシーに引っ越した時は、ここを去るのはさぞ名残惜しかっただったろうなと想像する。

ナポレオン 3 世時代の食堂

ずらりと椅子が並んだ豪華な大食堂では、40～50 人が一度に会食ができる。昔はどうやってサービスをしていたのだろうか？これだけの人数に皿を何度も運んで来るのは大変だっただろうなと想像する。ここでガイドさんが「どうしてレストランなどで女性に先にサービスするか知ってる？」と聞いて来た。「レディファースト？」「そう、その名残り」。レディファーストと言うと女性が大事にされているんだなという印象を持っていた私にガイドさんは「食事はみんな一斉に食べ始めるでしょ。女性に先に運んで来て、男性に最後にサービスすれば、男性の方が暖かい料理が食べられるじゃない」と言った。そういう意味だったのか？！これから「レディファーストでどうぞ」なんて言われたらムッとしてしまいそうだ。

ルーブルの支援をした団体の中に
神戸市の名もある

贅沢な美術鑑賞　　（2024.12）

パリまり（パリ在住）

以前、美術館は当日ふらりといっても、チケットをすぐ買えて入館出来たものだったが、今は人気の美術館などは前もって予約が必要だ。当日行ったアムステルダムのゴッホ美術館は予約でいっぱいで当日券はもう買えなかった。

マーケット

ローマのバチカン美術館などは1km位の行列が出来ていた。待ち時間を考えるとゾッとする。そこで前もって、少し高くはなるがオンラインで予約購入しておく。時間指定もあるが狙い目は朝一番、入館と同時に早足で左右の素晴らしい美術品には目もくれず、ある部屋を目指す。教皇選出の会議（コンクラーヴェ）が行われるシスティーナ礼拝堂、世界的に有名なミケランジェロの「創世記」のエピソードが描かれた天井画と「最後の審判」がある部屋だ。係員より早く着き、扉を開けてもらうのを待つ。いつもは人で溢れていて、どうしても漏れてしまう感嘆の声やお喋りに係員の「シーッ」という声が響く部屋なのだが、この方法で行くと、ほぼ独り占め状態を経験できる。ミケランジェロが、約4年間も上を見て描き続けた天井画、その後20年以上経ってから描かれた「最後の審判」。当時の様子を想像しながら、しばしこのひと時を過ごす。なんて贅沢な空間なのだろう。

オランダ、ロッテルダムの
「キューブハウス」

これを知ってしまうと、癖になる。今はもっぱらルーブル美術館の夜間営業日だ。閉館間近のアナウンスが流れて人がゾロゾロ出口に向かって歩き出す。そこをぎりぎりまで粘り、人のいなくなった自分だけの贅沢な空間を楽しむ。至福の時だ。たった一つの難点はゆっくりと鑑賞したいのに、見回りに来た係員に急かされる事だが、こればかりはどうしようもない。